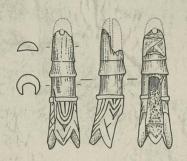
# 青苗貝塚における骨角器と動物遺体

~青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告~



平成14年度 奥尻町教育委員会

# 正誤表

誤

正

iiiページ 2 1 行 有栓弓耳型鹿角製品 →→ 有栓弭型鹿角製品

iiiページ 2.7行 有栓弓耳型鹿角製品 → 有栓弭型鹿角製品

# 青苗貝塚における骨角器と動物遺体

~青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告~

平成14年度 奥尻町教育委員会

# 発刊によせて

1976年・78年に道々奥尻島線(道々39号線)青苗市街〜奥尻空港間道路整備事業において、青苗 貝塚の緊急調査・発掘が行われていましたが、その結果、貝塚からの出土遺物は質・量ともに膨大な 数に達しました。

当時まだ町が、埋蔵文化調査に不慣れであったこと、出土遺物の量だけでなくその種類も多くそのため専門的調査研究が必要であったこと、さらに離島における交通手段としての道路整備事業に緊急着手しなければならなかったことなどの理由により、充分な報告が行えず、1979年3月刊行の「奥尻島青苗遺跡・図版編」のみで終わっていました。しかし、出土遺物が膨大であること、また、貝塚は擦文時代のものでは他に類を見ない質と量であることから各方面において注目を集めてきました。

近年、青苗遺跡出土の擦文時代の遺物を、国指定重要文化財に申請する動きが活発になり、それに伴って、青苗遺跡の出土遺物の所在の確認及びリスト化の必要に迫られました。青苗遺跡資料のうち、貝塚出土の骨角器は貝塚出土遺物の分類調査をしていた金子浩昌氏(当時早稲田大学教育学部)のもとで調査研究・実測図及びトレース図作成、原稿執筆がおこなわれていました。そのため、氏と連絡を取り、打合せた結果、骨角器の返却及び町費による、骨角器と動物遺体の資料紹介と報告を兼ねた当報告書発表が可能となりました。

当報告書作成に関して、金子浩昌先生には今まで調査研究、図版作成を行っていただいたほか、平成14年には7・10・12月と3度にわたって来島いただき、保存資料の確認、報告書作成などの打合せや、今後行うべき動物遺体の分類整理・データ化への道筋をつけていただきました。

報告書作成に関して、金子先生のご苦労、ご支援に心より感謝申し上げる次第であります。

本報告書が多くの皆様方に活用され、遺跡の重要性への理解が深められ、保存や活用の一助となれば幸いであります。

平成15年2月18日

奥尻町教育委員会 教育長 山内脩介

# 例 言

- 1. 本書は昭和51・52年に調査された青苗貝塚の概要と、貝塚出土の骨角器及び動物遺体の報告書である。
- 2. 本書の執筆は、第Ⅰ章を木村哲朗が、第Ⅱ~Ⅳ章を金子浩昌が担当した。
- 3. 実測・トレースは第I章は木村が、第 $II \sim IV$ 章が金子が担当した。
- 4. 写真撮影・現像は津山千尋が担当した(図版1・2の写真撮影を除く)。
- 5. 調査及び整理、報告にあたって次の諸氏、機関にご指導、ご協力を賜った。 乙部町教育委員会、上ノ国町教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター 赤沼英男、大沼忠春、種市幸雄、森広樹

# 凡例

1. 本書の縮尺は以下のとおりである。

青苗貝塚周辺の地形図:1/20,000 青苗貝塚の発掘区位置図:1/1,000 グリット配置図:1/100 土層断面図:1/50 土器実測図:1/4

骨角器実測図:1/2 海獣骨・鳥骨・貝類写真:1/3 鉄製品・魚骨写真:1/2

その他の写真については、実測図の縮尺に準ずる。

- 2. 表は節ごとにまとめ、基本的に節の末尾に掲載した。
- 3. PL. …とあるのは、1979年刊「奥尻島青苗遺跡・図版編」の番号である。
- 4. 骨角器の一覧表の単位は㎜である。

# 目 次

序…			
例			
凡			
目			
挿図	]目次		·····iv
挿表	長目次		v
写真	冥図版目次		·····vi
第 I	章 概要		1
1	青苗貝塚の概要	要······	1
2	発掘区と土層圏	断面······	1
3	遺物の概要		4
第Ⅱ	[章 骨角器		13
1	銛頭		13
2	銛頭未成品…		16
3	鹿角製銛頭の	製作工程	17
4	中柄		18
5			
6	銛頭と中柄…		23
7	ヤス状刺突具・		25
8	鳥骨製骨針…		26
9	有栓弓耳型鹿角	角製品	26
1	) 切断あるいはり	切り込み加工痕のある骨角について	27
第Ⅱ	[章 動物遺体…		31
第IV			
1	青苗貝塚の動物	物遺体の特徴と擦文人の経済活動について	43
2	青苗貝塚銛頭は	にみる形態的特徴とその系譜	46
3	青苗貝塚出土の	の有栓弓耳型鹿角製品について	51
	: がき		54
写真	<b>冥</b> 図版		·····57

# 挿図目次

$\boxtimes I - 1$	青苗貝塚周辺の地形図
図 I − 2	青苗貝塚の発掘区位置図3
$\boxtimes I - 3$	グリット配置図・貝層分布図
図 I − 4	土層断面図4
$\boxtimes I - 5$	貝塚出土土器(1)
図 I − 6	貝塚出土土器 (2)7
図 I − 7	貝塚出土土器 (3)8
図 I − 8	器種別土器分布図12
<b>図Ⅱ</b> — 1	銛頭(1)14
<b>図Ⅱ</b> - 2	銛頭(2)15
<b>図Ⅱ</b> — 3	銛頭未成品17
<b>図</b> II − 4	鹿角製銛頭の製作工程図17
図II — 5	中柄19
図II — 6	中柄未成品(1)21
図II - 7	中柄未成品(2)22
<b>図Ⅱ</b> — 8	アイヌ期の中柄と銛頭の装着状況24
図II — 9	ヤス状刺突具26
図Ⅱ-10	鳥骨製骨針26
図Ⅱ-11	有栓弭型鹿角製品27
図Ⅲ-1	青苗貝塚出土のアシカ最小個体数の出土量36
<b>図Ⅲ</b> — 2	動物遺体等出土状況図37
$\boxtimes N-1$	青苗(擦文期)・香深井・オンネモト(オホーツク)・瀬田内チャシ(17世紀)
	における脊椎動物遺体の最小個体数比較図45
$\boxtimes IV - 2$	縄文期よりアイヌ文化期にいたる銛頭の系譜47
<b>図IV</b> − 3	青苗貝塚出土の銛頭・・・・・・・・・・50
図IV − 4	室蘭絵鞆遺跡14号墳墓出土の「小刀柄」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
<b>図</b> IV − 5	北海道における有栓弭型鹿角製品の分布図

# 挿表目次

表 I - 1	深鉢形土器	
表 I - 2	坏形土器	
表 I - 3	小形土器	. 9
表 I - 4	壷形土器······	. 9
表Ⅱ-1	銛頭	·15
表Ⅱ-2	銛頭未成品······	·17
表Ⅱ-3	中柄	20
表Ⅱ-4	中柄未成品(1)	.22
表Ⅱ-5	中柄未成品(2)	·23
表Ⅱ-6	ヤス状刺突具	.25
表Ⅱ-7	鳥骨製骨針	·26
表Ⅱ-8	有栓弭型鹿角製品	·27
表Ⅲ-1	魚骨集計表	39
表Ⅲ-2	鳥骨集計表-アホウドリ類	40
表Ⅲ-3	鳥骨集計表-ゥの類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	40
表Ⅲ-4	アシカ類骨集計表(幼獣)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	41
表Ⅲ-5	アシカ類骨集計表(若獣)	41
表Ⅲ-6	アシカ類骨集計表(成獣)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
表Ⅲ-7	アシカ類骨集計表(全体)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
表IV-1	青苗(擦文期)・香深井・オンネモト(オホーツク)・瀬田内チャシ(17世紀)	
	における脊椎動物遺体の最小個体数比較表	44

# 写真図版目次

図版 1	貝塚の調査状況と貝塚断面57
図版 2	遺物出土状況58
図版 3	貝塚出土土器(1)
図版 4	貝塚出土土器 (2)60
図版 5	貝塚出土土器 (3)61
図版 6	貝塚出土土器 (4) • 鉄製品 · · · · · · · 62
図版 7	舒頭·舒頭未成品·中柄······63
図版 8	中柄・中柄未成品・ヤス状刺突具・鳥骨製骨針・有栓弭型鹿角製品64
図版 9	切断あるいは切り込み加工痕のある骨角資料65
図版10	魚骨(1)66
図版11	魚骨 (2)
図版12	貝殻・鳥骨68
図版13	ニホンアシカの骨69
図版14	L-10区海獣骨一括資料······70

# 第1章 概要

# 1 青苗貝塚の概要

青苗地区は、奥尻島南端に位置し、青苗岬が細長く突き出た地形である。岬の西側は断崖や急斜面をとおして海に迫り、東側は市街地となって、現在奥尻第一の漁業基地として栄えている。まさに3方を海に囲まれた市街地で、こうした"海"に開かれた地形が、平成5年の北海道南西沖地震で甚大な被害をもたらしたが、同時に古くから海と関わりを持つ人々が、生活をする拠点として重要な位置を占めてきた。

青苗貝塚は半島状に突き出した青苗岬の北東の基部、20~25mの斜面上に位置する。貝塚の南東側は、市街地をはさんで海を望み、南側は現在道々奥尻島線(道々39号線)が走っているが、かつては沢状地形となり、豊かな水源があったものと考えられる。また、地元の古老の話によると、かつて海は現在市街地である段丘下まで迫っていたと伝えているほか、現在の貝塚周辺にはかつてアイヌが住み、海獣やアワビ、鹿を捕って暮らしていたと伝えているなど、昔から海や沢を間近に控えた、恵まれた環境であったことが分かる。

当貝塚が初めて紹介されたのは、1931(昭和6)年に発表された深瀬春一の「奥尻島紀行」が始めである。その後、1949(昭和24)年の江差高校の調査や1950(同25)年の札幌西高校の調査を皮切に、1952(同27)年には鈴木尚ら東京大学による調査、1954(同29)年には桜井清彦らによる早稲田大学の調査が、1958年(同29)年には石川政治・千代肇らによる調査が行われ、当時、擦文時代としては珍しい貝塚の存在が注目を集めるようになってきた。

なお、当貝塚の北西側斜面には擦文期の鉄精錬関連の遺構が検出さているほか、沢を挟んだ南側である山本台地では、環壕の可能性がある"投棄溝"が、更には丁字頭勾玉やガラス玉、水晶玉などの 玉類や鉄製腰刀が出土した墳墓が検出されるなど、奥尻島においても擦文時代の数多くの遺構が発見 された地点である。

# 2 発掘区と土層断面

グリットは  $4 \text{ m} \times 4 \text{ m}$ で分割されたもので、南東-北西ラインはアルファベット( $J \cdot K \cdot L \cdot M$ )、南西-北東ラインはアラビア数字( $7 \sim 10$ )で表記した。貝塚は台地南東部の斜面 $20 \sim 25 \text{ m}$ の標高に位置する。貝層分布図では第  $1 \sim 3$  層に分かれて図示しているが、原図の説明では貝層の上位・中位・下位での分布差を示したものとなっている。貝層は上層を中心に獣骨層、貝層が、その下位には魚骨層、さらにその下位にはウニ殻の層(記述と土層断面図との照合で 9 層に属すると考えられる)が堆積する傾向にある。

出土遺物はJ-7・8区を中心に擦文土器、鉄滓、骨角器が多く出土する傾向にあり、貝層分布と 遺物の特に多く分布する地点がほぼ重なることが分かる。

土層断面は $J \cdot K - 8$ 区に設定された土層断面図を載せ、概要を以下のとおりに記す。

- 1 攪乱層 2 旧トレンチ 3 表土層 4 黄白色火山灰層 (Ko-dか)
- 5 黒色土層 6 暗褐色土層 7 混貝土層(遺物を含む、攪乱層か)
- 8 貝層(遺物を含む。下位に魚骨層あり) 9 黒色土層(ウニ殻などを含む)
- 10 黄橙色火山灰(B-Tm) 11 灰褐色土層 12 黒褐色土層

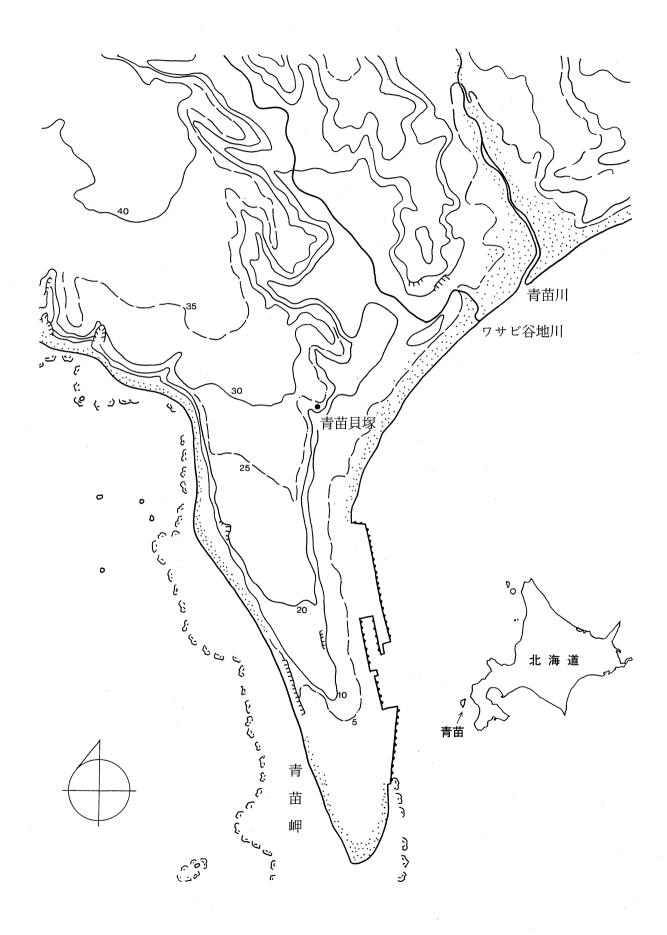


図 I -1 青苗貝塚周辺の地形図

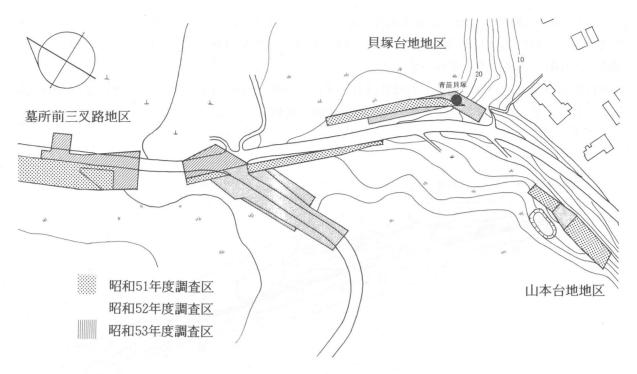


図 I - 2 青苗貝塚の発掘区位置図

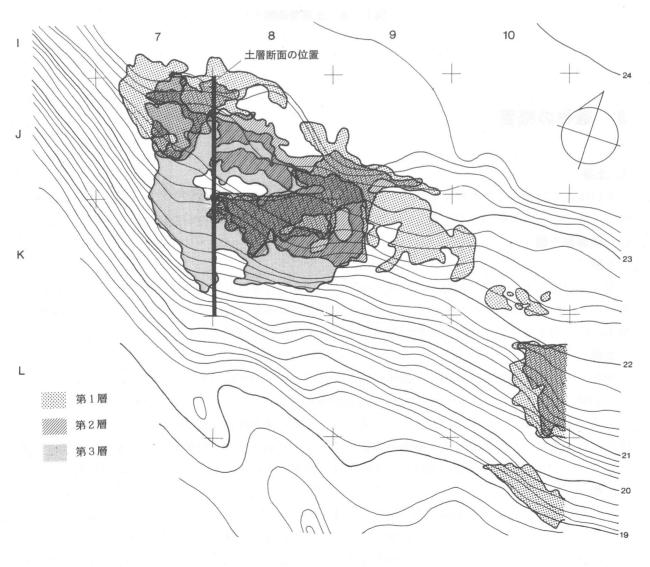


図 I - 3 グリット配置図・貝層分布図

4 は1,600年に降灰した駒ヶ岳 d 火山灰(K o - d)と考えられる。5 は腐食土層である。8 は貝層であるが、原図には貝層分布図のように3 層にわける層的な記載はない。10は900年に降灰した白頭山-苫小牧火山灰(B - T m)である。

層位的にみると当貝塚の機能した時代はB-Tmの降灰した900年以降であり、終焉は1,600年に降灰したKo-d以前、しかも、その下位に腐食土層が堆積していることなどから、そのかなり以前ということが言えよう。

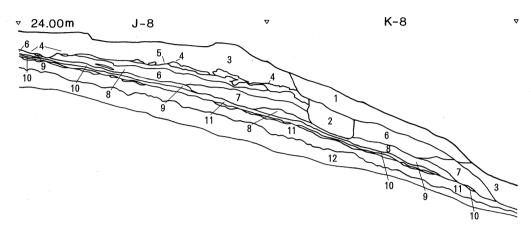


図 I 一 4 土層断面図

# 3 遺物の概要

### 1. 土器

本貝塚からは復元土器だけでも43点が出土している。ここでは、深鉢形土器をその器形から a  $\sim$  d 種、坏形土器 a  $\sim$  c 種、小型土器 a  $\sim$  c 種に分け、その特徴と大よその時期についてのべたい。

#### (1) 深鉢形土器

### a種

頚部が内傾せず、また、頚部と口縁部との間のくびれも目立たない。全体にすんなりと立ち上がる器形のもの。 $1 \sim 3$  がこれにあたる。3 を除き、器面調整後に口縁部にナデ整形を施す。1 は3 条の横走沈線がめぐる。 $1 \sim 3$  ともに器面調整にはハケメ状擦痕が認められる。

### b種

頚部が内傾し、胴部の張り出しが器体の高さ 3分の 2 以上の部位にあるもの。  $4 \sim 9$  がこれにあたる。調整は、 $6 \cdot 7$  がナデ整形後に体部に器面調整を施しているが、そのほかは器面調整後に口縁部にナデ整形を施す。 4 は 3条、 $6 \cdot 8$  は 2条、5 は 1条の横走沈線が認められる。 9 の横走沈線は場所により 2条ないし 3条となる。器面の調整は  $4 \cdot 5 \cdot 9$  が、ハケメ状擦痕、 $6 \sim 8$  がヘラ削りが施されている。 9 の器形は、他の 10 種と若干異なり、胴部の張り出しがより下位に認められる。

# c種

頚部がわずかに内傾し、胴部の張り出しが器体の高さ3分の2、もしくはそれ以下の部位にあるもの。 $10\sim14$ の5点がこれにあたる。調整は、14がナデ整形後に体部に器面調整を施すほかは、すべて器面調整を行った後に口縁部のナデ整形を施すものである。 $10\cdot11$ の口縁部には2条1組の刻文が鋸

歯状に施されている。11には刻文の上位及び下位に楔形列点文がめぐる。横走沈線は $10 \cdot 13$ が 3 条、 $11 \cdot 12 \cdot 14$ に 2 条めぐる。器面調整はヘラ削りであるが、10には頚部、13には口縁部にハケメ状擦痕が認められる。先にハケメ状擦痕が施されその後にヘラ削りを施したものである。14のヘラ削りは粗く、器面は"ささくれだった状態"である。

#### d種

頚部が内傾せず、口縁に向け大きく開く器形である。頚部と口縁部との間のくびれは20を除き、横走沈線が施され、明瞭に分けられる。 $15\sim20$ がこれにあたる。調整は、 $15\cdot18$ が器面調整後に口縁部にナデ整形を施したもの、 $16\cdot17\cdot19\cdot20$ がナデ整形後に器面調整を施したものである。 $15\sim17$ の口縁部には、2条 1 組の刻文が鋸歯状に施される。横走沈線は $15\cdot17$ には刻文の上位及び下位に 2条ずつ計 4条、16には刻文の上位に 2条、下位に 3条の計 5 条、18は口縁部に 3条、34 祭、35 発 185 年、188 日縁部に 38 条、188 日縁部に 38 条、188 日縁部に 38 を 189 日縁部に 38 を 189 日縁部に 38 を 189 日縁部に 38 を 181 日縁部に 38 を 182 日縁部に 38 を 182 日縁部に 38 を 183 日縁を表したものであるが、171 には胴部下位にへらみがきの後が認められる。 $18\sim20$ 1 は類部のあたりに、若干のハケメ状擦痕が認められる。 $18\cdot19$ 1 は 183 日縁を表した形跡がある。 $18\sim20$ 1 のへう削りは極めて粗く、184 日縁、器面が "ささくれだった状態"となる。

## (2) 坏形土器

#### a種

頚部に段があり、口縁部の外反するもの。 $21\sim27$ がこれにあたる。 $21\cdot22$ は体部にハケメ状擦痕の認められるもの、 $3\sim7$ はヘラ削りの調整が施されたものである。全て口縁部のナデ整形後に、体部の調整を施したものである。口縁部には $22\cdot23$ には3条、 $24\sim26$ には2条の横走沈線がめぐり、頚部には22に1条、25には2条の横走沈線が施される。 $23\cdot24$ には口縁部に×を基調とする刻文がめぐり、24にはその上位及び下位に楔形列点文が施される。

#### b 種

口縁部の外反は認められず、頚部に段をもたないもの。28~30がこれにあたる。28は器面にミガキの跡が認められ、29はハケメ調整を施した後、ナデ整形を施している。30は口縁部にナデ整形後、体部にヘラ削りを施す。口縁部の文様は3点とも2条の横走沈線がめぐり、28では口縁部に、楔形列点文により鋸歯状の文様を施している。30は横走沈線の下位に部分的に楔形列点文を施す。

#### c種

口縁部が内湾し、頚部の段をもたないもの。 $31\sim33$ がこれにあたる。器面調整は3 点ともナデ整形が施されている。33にはナデ整形を施した後、部分的にヘラミガキの跡が認められる。口縁部には $31\cdot32$ には2 条、33には3 条の横走沈線がめぐり、31にはその下位に楔形列点文、32には爪形の列点文が施されている。31はナデ整形後に体部の調整を施し、33は体部調整後にナデ整形を施している。32は全体にミガキが施されており、ナデ整形の痕ははっきりしない。

#### (3) 小形土器

#### a種

頚部のくびれるもの。36のみである。全体には雑な器面調整を施したのち、口縁部のみナデ整形を施し、頚部に2本の横走沈線をめぐらす。

### b 種

頚部のくびれの認められないもの。34. 35. 37~39がこれにあたる。35~37ではナデ整形を施したあとに、胴部にヘラ削りを施しているが、38は器面調整後にナデ整形を施している。39はナデ整形のみであり、輪積みの痕が残る。34・38には 2 条、35・39には 1 条の横走沈線が口縁部に施される。

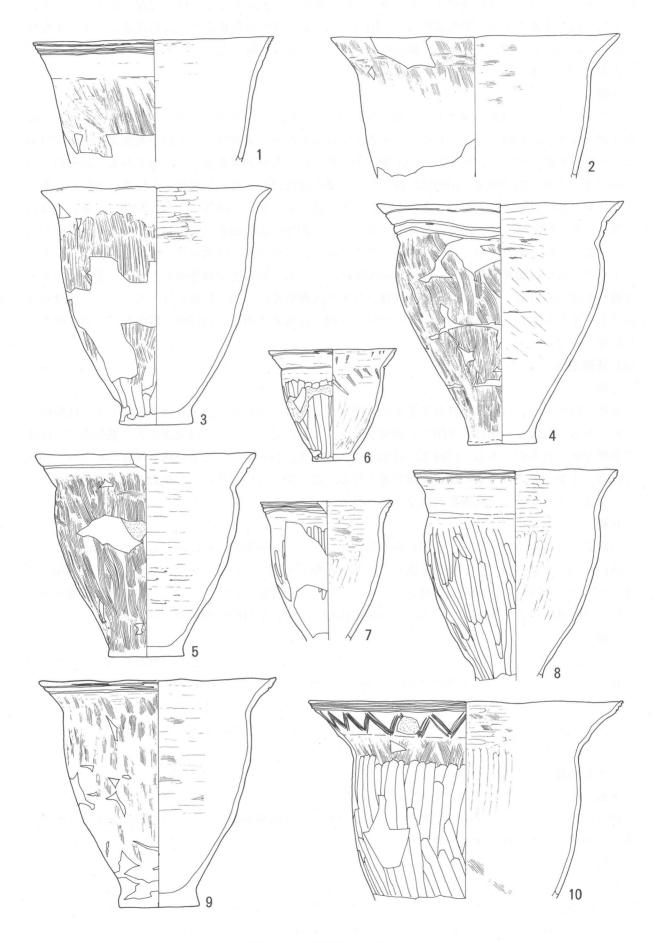


図 I - 5 貝塚出土土器(1)

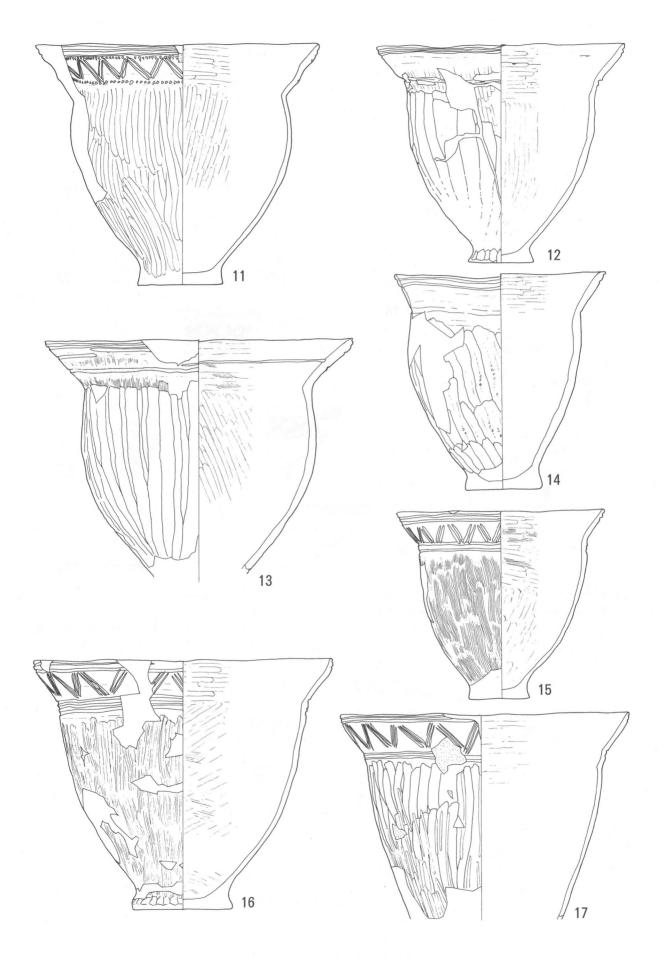


図 I - 6 貝塚出土土器(2)

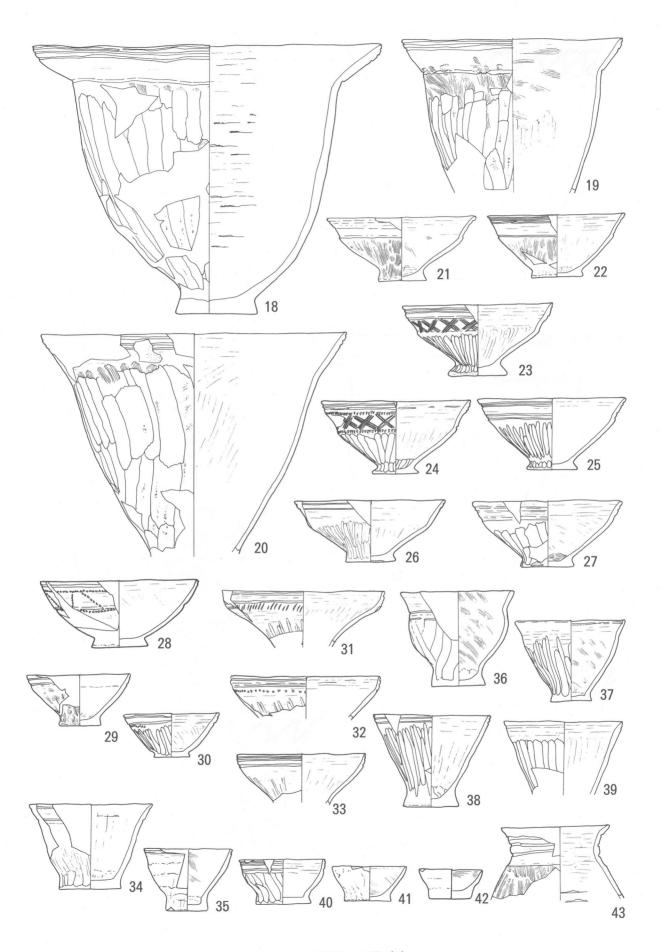


図 I - 7 貝塚出土土器 (3)

表 I - 1 深鉢形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	J - 7		25.5		0.6	1	
2	a	K – 8		30.4		0.5	2	
3	a	K – 8	25.0	24.5	8.0	0.7	- 3	
4	. b	J — 9	25.5	26.1	7.1	0.6	4	
5	b	J - 8	21.3	23.3	8.0	0.7	5	
6	b	J - 7	11.7	13.3	4.2	0.5	6	
7	b	J - 7		14.0		0.7	7	
8	b	J — 7		21.7		0.7	8	
9	b	J - 8	24.0	25.1	8.2	0.6	9	
10	c	J — 7	33.1		-	0.6	10	
11	с	J — 7	25.1	30.0	9.1	0.5	11	
12	С	J - 7	23.0	26.2	6.9	0.8	12	
13	С	G – 8		32.6		0.7	13	
14	c ·	J - 8	22.6	22.5	8.1	0.9	14	
15	d	K — 9	19.5	21.9	6.3	0.6	15	
16	d	K - 9	26.2	31.6	10.6	0.7	16	
17	d	J — 7		30.4		0.6	17	
18	d	K - 9	28.3	31.9	8. 7	10.0	18	
19	d	K – 9		23.3		0.6	19	
20	d	K - 9		32.3		0.6	20	

# 表 I - 2 坏形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	J - 8	6.7	15.5	5.0	0.4	21	
2	а	J - 7	6.6	14.7	5.3	0.3	22	
3	a	J - 8	7.5	15.8	6.3	0.4	23	
4	a	K - 9	7.6	15.8	4.9	0.4	24	,
5	a	J - 8	7.5	15.6	5.3	0.4	25	
6	a	K - 9	6.5	15.9	5.2	0.4	26	
7	а	K - 9	6.9	15.7	5.7	0.5	27	
8	b	J - 8	7.0	16.8	5.9	0.4	28	
9	b	I - 8	5.3	10.9	4.4	0.4	29	
10	b	L-10	4.6	10.2	3.8	0.6	30	
11	С	K - 9		15.8		0.5	31	
12	С	K – 9		17.1		0.4	32	
13	С	K — 9		13.5		0.4	33	

# 図 I - 3 小形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備考
1	a	K – 8	9.5	11.9	5.6	0.4	34	
2	b	K – 8	8.5	11.6	4.2	0.4	35	
3	b	J - 7	9.6	12.3	5.9	0.5	36	
4	b	K - 9	-	12.6		0.5	37	
5	b	K - 9	8.9	13.0	6.4	0.6	38	
6	b	K - 9	6.5	9.3	4.4	0.4	39	
7	С	J - 8	4.7	9.1	5.7	0.4	40	
8	С	J - 8	3.6	7.8	4.9	0.3	41	
9	С	J — 7	3.1	6.6	4.5	0.3	42	

# 図 I - 4 壷形土器

No	分類	グリット名	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器厚(cm)	図番	備 考
1		K – 8		11.4		0.5	43	

#### c種

いわゆるミニチュア土器である。口縁部は若干内湾したちあがる。調整は40は器面調整後に、口縁部にナデ整形を施すものであるが、41はナデ整形のみ、42には調整が殆どなされていない。40の口縁部には3条の横走沈線がめぐる。

## (4) 壷形土器

1点のみの出土である。体部にハケメ状擦痕が認められ、口縁部から頚部にかけてナデ整形を施す。 3条の横走沈線がめぐる。

以上にように器形別に、深鉢形土器 4 種、坏形土器 3 種、小形土器 3 種に分類した。器形と器面調整のあり方、口縁部文様の種類とは、必ずしも一致するわけではないが、全体としてみた場合、 a ~ d の各種と、調整のあり方、文様に相関関係が認められる。その事例をまとめると以下の通りになる。

## (1) 深鉢形土器

- ① a種で多く認められた、体部にハケメ状擦痕を持つ例がb種では半々、c・d種で少ない。
- ② a~c種では器面調整後に口縁部にナデ整形を施しているのが多いのに対し、d種ではナデ整形後に体部の器面調整を施すものが多い。
- ③ a種では少ない口縁部文様の横走沈線が $b \rightarrow c \rightarrow d$ と多くなる傾向にある。
- ④ 鋸歯状の刻文の施されたものが a・b 種になく、 c・d 種で認められる。
- ⑥ d種に1点のみミガキを施しているものがある。

### (2) 坏形土器

- ① a種ではすべて口縁部のナデ整形を施してから、体部の調整を行っているのに対し、b・c種では器面調整後にナデ整形を施したものも認められる。
- ② a種に施された口縁部文様は横走沈線のほか、刻文及び、刻文と列点文との組み合わせのものであるが、 $b \cdot c$ 種は列点文によるものである。
- ③  $b \cdot c$  種には器面にミガキの施されたものがある。特に c 種は 3 点全がミガキによる調整である。

#### (3) 小形土器

- ① a種の1点は、器面調整後にナデ整形を施しているのに対し、b種ではナデ整形後に体部の器面調整をするものが多い。
- ② b種に1点のみミガキを施しているものがある。

上記の記述をみると、各器種における器形と器面調整・文様との間に相関関係があり、それは、各器形との間における若干のスタイルの差を反映しているものと考えられよう。管見の限りでは、各器種間における類似する特徴は把握しにくいが、器形では、深鉢形 c 種と小形 a 種、並びに深鉢形 d 種と小形 b 種が(特に34.35.37)、器面調整においてハケメ状擦痕が比較的多く認められるという点では深鉢形 a ・ b 種と坏形 a 種が、ミガキを施す土器があるという点では、深鉢形 d 種と坏形 b を e 種、小形 b 種が共通しているといえよう。

次に、周辺の遺跡についての様相を見てみたい。

乙部町小茂内遺跡の例では、『渡島半島南部の擦文時代の防禦集落』において、"口径に対して器高が低く、胴体部が脹らみをもち体部全体にヘラケズリが施されるタイプと、口径に対し、器高が高く体部の膨らみがなく体部全体にカキ目(擦痕)か、ナデが施される2タイプに大別できる"として

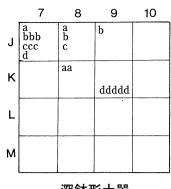
おり、当遺跡の深鉢形 d 類は、 "口径に対し高が低く" "体部にヘラケズリが施される" ところで小茂内遺跡出土の前者のタイプと共通し、一方、深鉢形  $a \cdot b$  種及び札前例は、後者の特徴に共通する面が認められ、このことは、著者の森も述べているところである。

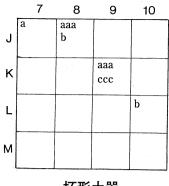
文様等を各要素でみてみると、本貝塚出土復元個体43点のうち、主にハケメ状擦痕による器面調整が施されているもの12点(28%)、刻線文の施されているもの 7点(16%)となるが、小茂内遺跡24点の出土遺物においても、主にハケメ状擦痕による器面調整が施されているものが 6点(25%)、刻線文の施されているもの 3点(12%)で、若干小茂内例が少ないものの、似た頻度を示す。また、無文(沈線文や刻線文、刻みなどの認められないもの)の土器は本貝塚で 5点(12%)認められるが、小茂内では 2点(8%)であり、ともに低い頻度であり、器形、文様ともに似た特徴を持つといえよう。一方、細かい部分をみると、横走沈線が多く認められることや、ミガキの施されたものが若干多いこと、深鉢形土器で胴部が張り出す器形が多いこと、小形土器の器形など、本貝塚例における深鉢形  $\mathbf{c}$  ・  $\mathbf{d}$  種や坏形  $\mathbf{b}$  ・  $\mathbf{c}$  種、小形  $\mathbf{b}$  種にみられる特徴が強いようである。

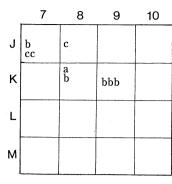
松前町札前遺跡の例では、報告で久保は、出土土器を、遺構の分類に基ずき、それとの共伴関係から  $I \sim \text{III} \subset V$ 、VI、VII・VIIという変遷を想定している。本貝塚の器形を札前例と対応させると、深鉢形 a 種は  $I \sim \text{III}$ に、同り種は  $IV \sim VI$ に類似すると言えよう。札前例は復元個体の各要素を一覧表にして示しているが、それによると、ハケメ状擦痕による器面調整が認められるものが総点数 283点のうち 211点(75%)であり、本貝塚や小茂内例と頻度は大きく異なる。しかし、札前例の  $I \sim \text{III}$ 及び  $IV \sim VI$ に類似する器形であるとした、深鉢形  $a \cdot b$  種に限って言えば、総点数 9 点のうちハケメ状擦痕の認められる例が 6点(67%)となり、札前出土の深鉢形土器 185点のうち、ハケメ状擦痕の認められたもの 163点(90%)と同様に高い。また、口縁部が無文であるもの(沈線文や刻線文、刻みなどの認められないもの)の割合は、本貝塚の深鉢形  $a \cdot b$  種では 9 個体中 2 個体(22%)、札前例では、口縁部の確認できる深鉢形土器 169点のうち、無文のものは 36点(21%)となり、似た頻度である。また、刻線文の施された個体は深鉢形  $a \cdot b$  種には認められないが、札前例でも全体の 4%と極めて低い頻度を示す。このようにしてみると、深鉢形  $a \cdot b$  種と札前の例はよく似ていると言えよう。

札前の報告で久保は、下限時期を10世紀代~12世紀後半期、黒色土層堆積のための若干の年月を考慮して11世紀~12世紀後半期と推測している。一方、『渡島半島南部の擦文時代の防御集落』では、青森県側の新しい研究成果をもとに、その出土土器との類似などから、札前については11世紀代に収まりそうであるという。筆者も札前と似た特徴と要素をもつ深鉢形 a・b種は11世紀頃の間に収まるものと考える。

一方、深鉢形 d 種については、どうであろうか。図 I-8 は器種別における各器形の分布図である。深鉢形土器における分布図では d 種が 6 点のうち 5 点が K-9 区に出土し(K-9 区の深鉢形の全てが d 種)、坏形土器では c 種は全て K-9 区の出土、小型土器では b 種 5 点のうち 3 点が K-9 区から出土しているのがわかり、器形ごとの分布図では K-9 区が特異の様相を呈しているのが分かる。図 I-3 でみるとおり、K-9 区における貝層の平面分布はその多くが第 I 層であり、K-9 区に分布する貝層は他のグリットに分布する貝層より新しい層で占めているといえよう。深鉢形 d 種・坏形 c 種、小型 b 種がセット関係にあるとは言えないまでも、それらが、同じ器種における他の器形の土器よりも、時期的に下る可能性が高いといえよう。







深鉢形土器

坏形土器

小形土器

図 I - 8 器種別土器分布図

### 2. 鉄製品

本貝塚の北西側には鉄生産関連の遺構が検出されており、当貝塚からも、多くの鉄製品が出土して いる。出土鉄製品の多くは棒状鉄製品(図版 6-1)であり、他に刀子(図版  $6-2\cdot 3$ )や鉄製紡 垂車図版  $(6-4\cdot 5)$  や鉄鍋片 (図版  $6-6\sim 8$ ) が出土している。

当貝塚の北側には同時代の鉄生産関連の遺構が検出されており、ここから検出された鉄滓から、銑 鉄を鋼にする、精錬が行われていたことが推測された。当貝塚には、鉄鍋片も若干認められる。使用 不能となった鉄鍋片や棒状鉄製品を素材として、水産資源の処理に必要な鉄器を製作していたものと 考えられる。

なお、鉄製品は腐食や一部破損が進行しているため、図示せず、写真を紹介するに留めた。

注) 赤沼英男氏の御教示による。

# 第Ⅱ章 骨角器

# 1 銛頭

今回の発掘で確認した銛頭は完成品15点、未成品8点である。

全て開富式に属するもので、索溝を持ち、頭部や尾部の構造等において共通点が多く、斉一性を もった銛頭製作がおこなわれていたようである。

以下、まず、完成品についての形態の特徴を述べ、各部位の観察、計測値、素材は表にして示すことにする。未成品については別に製作工程を中心に考察するつもりである。また、第IV章にて青苗貝塚の銛頭の系統について考えてみたい。

なお、ここで使用した銛頭各部分の名称については図Ⅱ-1図左上に示す。

# (1) 第1類:先端が長く尖るもの (図Ⅱ-1~3)

肋骨製と鹿角製のもの計 5 点、全体に細長く尖端から尾部にかけて直線的に巾広くなる。尾端から 索溝までの長さに比べて先端部の長さが 2 倍と長く、先端は断面円形で円錐形に削る。

# **a 肋骨製**(図Ⅱ-1-1・2)

3 例ある。アシカ類の大形の肋骨が使われる。鹿角製の製品に比べ背面の反り返りは大きくなる。 また索溝のための抉り込みは浅い。

# **b** 鹿角製(図Ⅱ-1-3)

3点出土。いずれも角幹部を利用したものと思われ、尾部から先端付近まで海綿体が縦にはいっている。背面が反り返る形が優先したとみえ、鹿角のわずかな湾曲によって海綿体が背面に出ることもある(図II-1-3)。これは、尾部の半分以上が海綿体だけになってしまい弱くなる欠点がある。 3点とも索溝をつくる際、先端との境は一段削るだけであるのに対し、尾部との境は巾 $1.5\sim2$ mm程厚の隆帯をつくっている。これは銛の索き綱が外れないためであるのと同時に補強するためもあったのではないかと思われる。

# (2) 第2類:扁平で分岐する尾部の両端に刻みをもつもの( $oxtimes II-1-4\sim 7$ )

鏃をもつもの1例。鏃装入のスリットをもつもの3例。

# a 鏃をもつタイプ (図II - 1 - 4)

小形で扁平である。海獣肋骨を利用している。反りは緻密質側に索溝がつけられるのでほとんどない。海綿体が製品の背面に出ている。索溝から尾部にかけては、緻密質を削るので薄くなっている。 尾部の両側には、1.5mm 位の間隔で浅い細かな刻みが 9 ケ所につく。

# b 鉄鏃を挿入する例( $oxtimes II - 1 - 5 \sim 7$ )

頭部はスリットと目釘穴をもつ。そのための厚みと共通の構造をもち、鹿角製に限られる。鉄鏃をとめた部分は索き綱を引く時最も力が加わり、スリット部分を破損したり、目釘穴部分がこわれてしまったりする欠損が生ずることになる。

3類と比べて小形で扁平である。索溝から尾部下端の外側に刻みをつける。図 $\Pi-1-5$ は、目釘穴が横に2つ並ぶ特殊な例であるが、一つは中心からそれた位置にあって極端に小さい。

# (3) 第3類:尾部に装飾の線刻をもつ $( 図 II - 1 - 8 \cdot 9 、 図 II - 2 - 10 \sim 13 )$

#### a 巾広いタイプ (図 $II1-8 \cdot 9$ 、図II-2-10)

基本的なかたちは第 2 類 b と変わらないが、索溝は巾広く半円形の断面をもつ。索溝の抉り込みは明瞭である。背面上の隆帯に刻みをつけたもの(図  $\Pi-2-10$ )や、尾部に孤線を組み合わせた彫刻があるもの(図  $\Pi-1-8 \cdot 9$ )など装飾性加工を施す。鹿角枝部もしくは緻密質の比較的厚い第 1

尖~第2尖間の角幹部を利用したものと推定される。

# b 断面が円形でソケットの深いタイプ (図Ⅱ - 2 -11~13)

鹿角枝部が素材である。索溝部は断面円形で、尾部は扁平に作られ、腹面の索溝部よりやや下方で段がつけられて尾部をつくっている。図 $\Pi-2-13$ はスリットの入る方向が他の標品と90度ずれる。鏃を固定しやすくなるために、スリットを索溝面と直交する方向に入れている。

## (4) 第4類: 尾部が三つに分かれるもの $( 図 II - 2 - 14 \cdot 15 )$

青苗貝塚の銛頭の典型とされる形と尾部に線刻をもつ類である。鹿の第2尖部分を用いたものと思われる。器体表面が円形であるため、尾部は3つに分けられ、文様も3単位が意識されたようである。ソケットは他のどの類よりも深い。

2点の銛頭のうち、図 $\Pi-2-14$ は焼けて黒変し、やや収縮していると思われる。尾部の文様のうち右側の文様は省略されて本来三単位であるべきものが右端では無文となっている。尾部を横断する一本の刻線で、線対称の軸とするか三角文が彫られ、全体で菱形が重なったような文様となっている。これでさらに放射する細線が菱形を囲む。図 $\Pi-2-15$ は、U字型もしくはV字型の弧線が重ねられた文様で叉状文も組みあわされている。先端には索溝の段のほか、頭部にも装飾的な浅い段がつく。

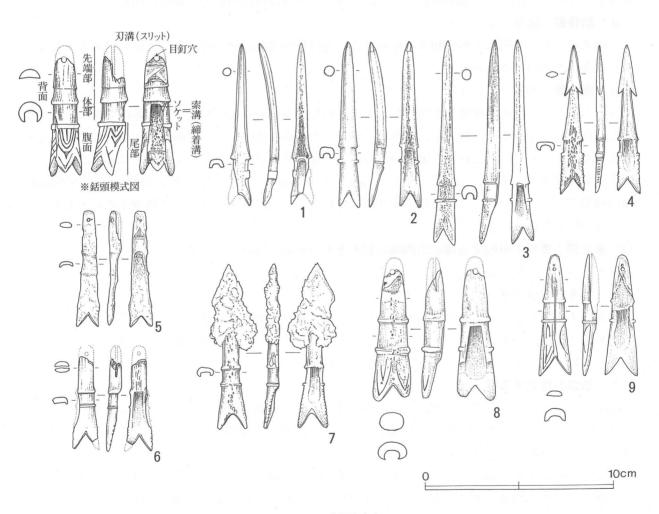


図 I -1 銛頭(1)

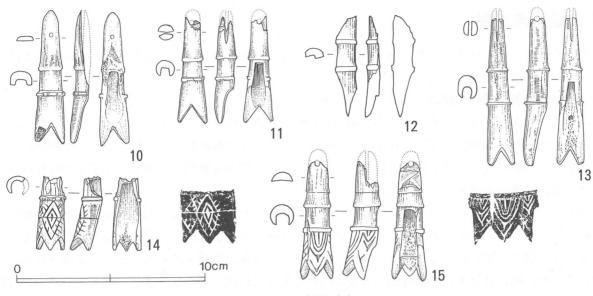


図 I - 2 銛頭(2)

表 II — 1 話頭 (1) 第1類: 先端が長くとがるもの a:肋骨製

番号	挿図番号	全長		先	端	部		器	体	部		尾	部		材料	出土地点	図版編番号
			欠損状況	先端	中央断面	隆帯	最大長	ソケット	中央幅×厚	最大長	隆帯	尾	最大長×幅×厚	装飾		8 P B	33.11
1	⊠Ⅱ-1-1	83.9	尾部左欠損	尖る	5.3×4.3	両側に段 を付ける	60.2	5.3×4.3	7.8×4.3		両側に隆帯	$-\times 5.5$	$14.6 \times - \times 3.1$	無し	海獣肋骨	SK-8	PL33-5
2	図II − 1 − 2	87.0	完存	多面体で尖る	5.8×6.0	両側に段 を付ける		3.7×1.2	8.1×5.6	7.2	両側に隆帯	2 9.5×7.9	24.7×11.2×4.2	無し	海獣肋骨	S J - 7	PL33-1
ŀ	o: 鹿角製		= E.E1												- 9 11		n ba
3	図Ⅱ-1-3	106.7	完存	尖る		索溝の段 がめぐる		3.7×2.5	8.4×6.9	7.2	隆帯がめぐる	2 8.8×7.8	24.0×11.0×4.4	無し	鹿角	S J - 7	PL33-2

(2)第2類:扁平で尾部の内側に刻みをもつもの

a:鏃をもつタイプ

番号	挿図番号	全長		先	端	部		器	体	部		尾	部		材料	出土地点	図版編番号
			欠損状況	スリット	目釘孔	隆帯	最大長	ソケット	中央幅×厚	最大長	隆帯	尾	最大長×幅×厚	装飾		7 1	
1	図Ⅱ-1-4	77.6	ほぼ完存	一対		両側のみ	49.8	5.8×1.9	9.5×4.2	7.2	両側のみ	2 13.0×8.4	21.2×18.8×3.0	両側に刻み	海獣肋骨	S J -10	PL33 - 7
1	o : 鉄鏃を挿入する例																
2	図Ⅱ-1-5	61.4	頭部上半	鉄分付着 -×1.5	1	索溝を浅 くえぐる	現存長 18.9	5.5×1.2	8.6×5.0	6.9	2本の刻線 浅い	$\begin{array}{c c} 2 \\ -\times 8.7 \end{array}$	22.3×13.5×4.5	両側に刻み	鹿角	S J -10	PL33-10
3	⊠II - 1 - 6	(48.3)	腹側欠損	13.9×-	2,大小横列 和培	索溝を浅		6.5×0.9	7.8×3.7	9.3	摩滅	2 10.5×7.8	28.8×12.2×3.7	両側に刻み	鹿角	S J - 9	PL33-12

9.0

5.3×0.9 8.4×5.6

2

22.6×15.6×4.3 両側に刻み

鹿角

S J - 8

PL33-8

鉄鏃部分含む

55.6

(3) 第3類:尾部が2つに分かれ装飾の彫刻をもつ

88.2

鉄鏃

装着

図Ⅱ-1-7

4

	a . 1111/2 (194)	/															
番号	持 挿図番号	全長		先	端	部		器	体	部		尾	部		材料	出土地点	図版編番号
			欠損状況	スリット	目釘孔	隆帯	最大長	ソケット	中央幅×厚	最大長	隆帯	尾	最大長×幅×厚	装飾	4 - 1 - 70	10 0	
1	図II − 1 − 8	1(691)	背腹とも目釘 孔以上欠損	鉄分付着 -×1.2	1	幅1.5の 隆帯	現存長 22.3	7.8×5.0	5.3×8.9	12.8	深く削る尾部	2 13±×11.5	29.0×20.7±×7.0	弧状沈線	鹿角	S J - 9	PL34-2
2	図II-1-9	69.3		鉄分付着 21.7×-		両側のみ	25.4	7.0±×2.4	11.3×7±	9.2	隆帯めぐる	2 15×10.6	29.8×17.5×4.6	有り	鹿角	S J - 9	PL34-1
3	図II − 2 −10	63.8	背腹欠損	25.5×-	1	索溝を浅 くえぐる	30.6	5.9×3.0	5.9×3.0	11.3	刻目文あり	2 11.5×9.0	27.0×15.6×5.1	無し	鹿角	S J - 7	PL34-3

b:断面部が円形でソケットの深いタイプ

4	⊠ II - 2 -11	(55.4)	背腹との目釘 孔以上欠損	鉄分付着 -×1.2	1	索溝を浅 くえぐる	現存長 23	5.7×5.5	10.1×8.9	8.9	隆带	13.2×9.9	24.6×15.0×5.9	無し	鹿角	S J - 7	PL33-11	
5	⊠ II − 2 −12	(53.9)	右側縦列片	-	7-7	索溝を浅 くえぐる	-	-	-×9.5	12.0	隆带	2 -×-	$22.5 \times - \times -$	不明	鹿角	S J - 7	PL34-15	
6	⊠ II - 2 -13	77.0	背腹とも目釘 孔以上欠損	-×1.5	1	細い隆帯	現存長 22±	4.6×4.8	10.8×10.4	15.3	細い隆帯	2 10.7×9.5	34.0×14.6×6.9	無し	鹿角	S J -10	PL33-9	

(4) 第 4 類: 尾部が 3 つに分かれるもの

番号	挿図番号	全長		先	端	部		中	央	部		尾	部		材料	出土地点	図版編番号
		2	欠損状況	スリット	目釘孔	隆帯	最大長	ソケット	中央幅×厚	最大長	隆帯	尾	最大長×幅×厚	装飾		, 1	
1	図 II − 2 − 14	(40.4)	先端部欠損	-		_	-	8.2×6.0	12×9.6	-	隆帯をなす	3	29.0×14.4×10.4	幾何学沈線	鹿角	SK-7	PL34-7
2	⊠Ⅱ-2-15	(61.5)	目釘孔以上 欠損	鉄分付着	-	索溝の段 がめぐる		6.4×7.0	12.7×11.9	11.0	隆帯をなす	3	25.0×17.5×11.7	弧状沈線	鹿角	S J -10	PL34-8

# 2 銛頭未成品

銛頭未成品と思われるものが 8 点ある。そのうち完成品と結びつけられるもの 4 点、完成品と直接 結びつけられないもの 4 点である。

# (1) 海獣肋骨製の銛頭未成品 (図Ⅱ-3-1・2)

図 $\Pi-3-1$ は、肋骨の緻密質に近い部分を切断し、適当な長さと巾をもつ細長い板状に整え、索溝の位置を決め、両側から1.5~2mmの切り込みを入れて、尖端部をさらに細く尖らした段階のものである。これから次に索溝を作る突起をつくり出すように側面を整形し、尾部のV字上の切り込みをつけ、腹面に浅い索溝をえぐれば完成する。

図 $\Pi-3-2$ は、先端は火を受けて変質し折れてしまったようである。前者と同様、細長い板状の材料を作ったのち、側面や裏面を先端にかけて次第に細くなるよう削り、銛頭の原型を形づくる。全体からみて適当と思われるところに、横位に切痕をつけ体部の位置を決める。そして索溝を作る。さらにこの例の場合は尾部が、四方から末端に向けてV字状に鋭く尖らせるように削っているのが特徴である。あるいは、完成品には見られないが、尾部が2つに分かれないで尖る形の銛頭となるのかもしれない。

## (2) 鹿角製の銛頭未成品 (図Ⅱ-3-3~6)

図II-3-3は、尾部のわずかな破損部分以外は全体を残す。長さ、63.0mm、幅9.4mm、厚さ11.0mm(幅、厚さは頭部最大値)。先端のスリット作成と尾部の切り込みを残した未成品。索溝壁の一部を欠損、尾部の切り込みはなく、平らに切断されたままである。おそらくこの加工が最終の工程だったのであろう。索溝の破損がこの成品を廃棄する要因になったものと考えられる。

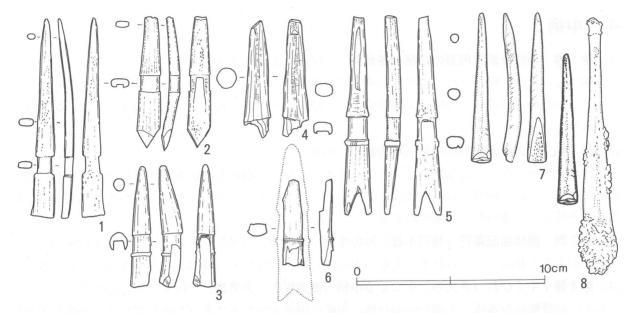
図 $\Pi$ -3-4は、先端と索溝の一部を残すもので、長さ、62.3m、幅14.2m、厚さ12.8mである。 た端部とされた部分は縦方向の削りが全面について整形される。この削りは金属刃を鹿角加工面に縦に引っ張るように削るので横方向の細かい刃跡が付く。さらに索溝部を作るために鹿角表面は削られて平坦面がつくられ、さらに索溝部分の浅い抉りも作られた段階であった。先端部分のスリットの作成、尾部の切り込みなどが残された作業ではなかったかと思われる。

図 II-3-5 は、完存する未成品で、全長105.2mである。先端部に鹿角の自然面である窪みが残り、尖らずに裁断されたかたちである。その他の索溝、尾部の加工は終わった段階とみてよいと思われる。最終的に先端を研摩する作業が残されているのであろう。

図II-3-6は、索溝部の周囲を残すのみの破片で、現長47.2mm、幅12.0mm、厚さ8.1mmである。表面には鹿角の自然面が残り、未加工であることがわかる。しかし索溝部下縁の隆帯部が見られる。海綿体側には索溝の切り込みと索溝の抉りがみられるが、加工途中であることが残された痕跡から判断される。加工途中においてかなり破損したもので、製作の方針を変更していたことも考えられる。いずれにしても、この種の銛頭の製作にあたり、索溝部の位置を隆帯で決めること、スリットを入れることなどが、早い時期に行われたことがわかる。

## (3) アシカ陰茎骨利用の銛頭未成品 (図Ⅱ - 3 - 7)

図 $\Pi$ -3-7は、完存する未成品で、長さ78.7m、幅10.7m、厚さ6.6m(尾部)。肋骨には見られない丸みと、銛頭の背面基部の表面に、陰茎骨に特有の形態(わずかな窪みと小孔群)をみる。陰茎骨の先端と基部を切断して細く削ったものである。厚さはもとの陰茎骨の半分位までに削っている。海綿体が露出しない範囲で削り、全体を細くしたのである。尾部を作るために斜めに切断したところで加工は終わっている。現存の製品に見る限り陰茎骨を素材とした銛頭はないが、この資料のあることからみれば、完製品もあったことが予想されるのである。



図Ⅱ-3 銛頭未成品(8:7を陰茎骨と並べて示した図。右がアシカ陰茎骨上面)

# 表 II ー 2 銛頭未成品 (1) 海獣肋骨製の銛頭未成品

	(T)	10年10月日初20月	RANNALII	1			_		
習	肾号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材質	出土地点	図版編番号
	1	⊠II - 3 - 1	106.6	細く尖る 巾×厚: 9.4×4.5	両面から1~2mmの切り込みが入る。 素溝なし。巾×厚:7.0×4.1	V字状の切り込みなし。 巾×厚:11.3×4.0	肋骨	SJ-8	PL33 - 3
	2	図II − 3 − 2	69.1	火を受けて変質、欠損。 巾×厚:10.5×5.4	1 3000	V字状の切り込みなく、鋭く尖る。 巾×厚: 11.2×4.4	肋骨	SK-7	PL34-5

#### (2) 鹿角製の銛頭未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	尾 部	材質	出土地点	図版番号
3	<b>⊠</b> II − 3 − 3	63.0	索溝作成を残す。巾×厚10.6×9.1	索溝壁の一部、破損する。巾×厚:10.2×9.3	V字状の切り込みなし。巾×厚:11.5	鹿角	SL-10	PL34-11
4	⊠ II - 3 - 4	62.3	索溝作成を残す。	索溝の加工あり。	the state of the state of the state of	鹿角	SK-10	PL34-12
5	<b>図</b> II − 3 − 5	105.2	自然面の窪み残る。巾×厚:11.5×7.3	索溝の加工あり。巾×厚:10.1×6.6	V字状の切り込みあり。巾×厚:14.6×4.6	鹿角	SK-10	PL33-4
6	⊠ II — 3 — 6	(47.2)	索溝の切り込みが加工途中。	隆帯をつくる。	破損する。	鹿角	SM-10	PL34-14

## (3) アシカ陰茎骨製の銛頭未成品

があったようである。

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器体部	尾 部	材質	出土地点	図版編番号
7	<b>⊠</b> II − 3 − 7	78.7	先端は丸みを残す。	巾×厚:7.4×6.8	斜めに切断するのみ。	陰茎骨	SJ-7	PL33-6

# 鹿角製銛頭の製作工程

いくつかの未成品資料から製作の工程が考えられるが、つねに同じ工程がおこなわれていたわけで はなかったようである。器種による違い、個人差もあったかも知れない。以下判明した工程を①~④ の順に列記するが、細部では前後すること

- ① 枝部分の先を、銛頭の全長に合わせて 切断する。
- ② 索溝部分から尾部末端に至る部分を 割って海綿体を削ってソケットがつくら れる。
- ③ 索溝部の浅い溝と隆帯部がつくられる。
- ④ スリットと尾部の切り込み、彫刻が行 われる。スリットは②の段階でつくられ ることもある。

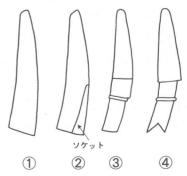


図 II - 4 鹿角製銛頭の製作工程図

# 4 中柄

(1) 第1類:器体断面楕円形の中柄 (鯨骨製) (図Ⅱ-5-3・6)

全体はていねいに整形され、楕円形の断面で器体全体がつくられている。先端にいって薄くなるが、 $5 \sim 6 \text{ mm}$  前後の厚みが、中柄の先端部分として使われたと思われる。柄部は断面円形で、切り込みの刃跡がのこる。

(2) 第2類:器体断面円形の中柄(鯨骨製)(図Ⅱ-5-7)

全体がやや短くなる。先端はやや丸みをもつようになり、胴部が円形を呈するだけふくらみの強い 形態になる。なお、胴部が長方形になるようなつくりもある。このかたちで先端が著しく尖るのがあ り、刺突具として使われた可能性がある。

- (3) 第 3 類:器体断面扁円(楕円半裁)形の中柄(鯨骨製)(図 II − 5 − 1 ・ 4 ・ 5 ・ 13 ・ 14) 器体が平面と曲面でつくられる。先端が尖らないが、鋭角に尖らせるかたちをみることができる。
- (4) 第4類:中くびれ (矛先形) をつくる中柄 (鹿角製とシカ骨製) (図Ⅱ-5-15~19)

多くに鯨骨製品が器体、先端が刺突具様に単純に細まるかたちであったのに対して、先端が矛先形をつくり、器体部にも変化をつけた形態のものがつくられている。基本的には、鹿角製でつくられ、それを中足骨で模してつくったのであろう。

a 鯨骨製 (図Ⅱ-5-15)

確認できたのはこの1点で、先端を破損するが、やや幅広く、扁平、一端にくびれて器体部をつくり、基部で幅広く厚みを増す。短い柄部をつける。

**b** 鹿角製(図Ⅱ-5-16)

1点があったのみである。現長133.73、先端部幅10.20である。鹿角の緻密質部分でつくられ、一部に鹿角表面の自然面をみる。先端は矛先形で、紡錘形、中間部で少しくびれるが、器体部から基部に厚みを増し、頑丈なつくりとなる。表面には縦方向に削った刃跡が並び、それに直行する細かい刻み痕が付く。

**c** シカの中足骨製 (図Ⅱ-5-17~19)

中足骨の前面部が使われる。この骨の前面中央の縦溝は深く、縦割りに適したかたちであったことから、この部分を利用するようになった。中柄は先端部の平たく紡錘形に中膨れのする部分と中間部のくびれ部、基部の厚みを付けて短い柄部になる。3例のいずれにも中手もしくは中足骨の外面の一部と髄腔面が残される。

図 $\Pi - 5 - 17$ は、この製品の特徴を最もよく示す製品である。先端の紡錘形はていねいにつくられ、薄すぎるのではないかと思うほど削り込んでいる。裏面は平らで、中央に幅浅い溝が直行する。この溝は、中足骨前面の髄腔面で幅狭い。中間部はやや細くくびれ、わずかに幅を増す。基部は厚さを極端に増し、その端は短い柄となる。基部と柄は中足骨の近位骨端の直下である。

図 $\Pi - 5 - 18$ は、図 $\Pi - 5 - 17$ とほぼ変わらない。中足骨からの製品のとりかた、製作の方法も同じであるが、基部に緊縛のための浅い窪みの見られる点が異なる。

図 $\Pi-5-19$ は、先端部を欠くが、図 $\Pi-5-17\cdot18$ とかたちが違う。素材を中足骨としたことは同じで、基本的には同じであるが、先端の膨らみの少ないこと、したがって中間部のくびれはわずかで、基部は厚みよりも横幅が広く、柄部が尖る。この鋭い尖りのために、こちらを先端部と考えたことがあったが、逆である。この柄の部分には金属刃で削った刃跡を残す。裏側に図 $\Pi-5-17$ 、18と同じ溝をみるが、やや幅広い。これは素材のとりかたが、中足骨の前面よりも側面にかかっているためと思われる。

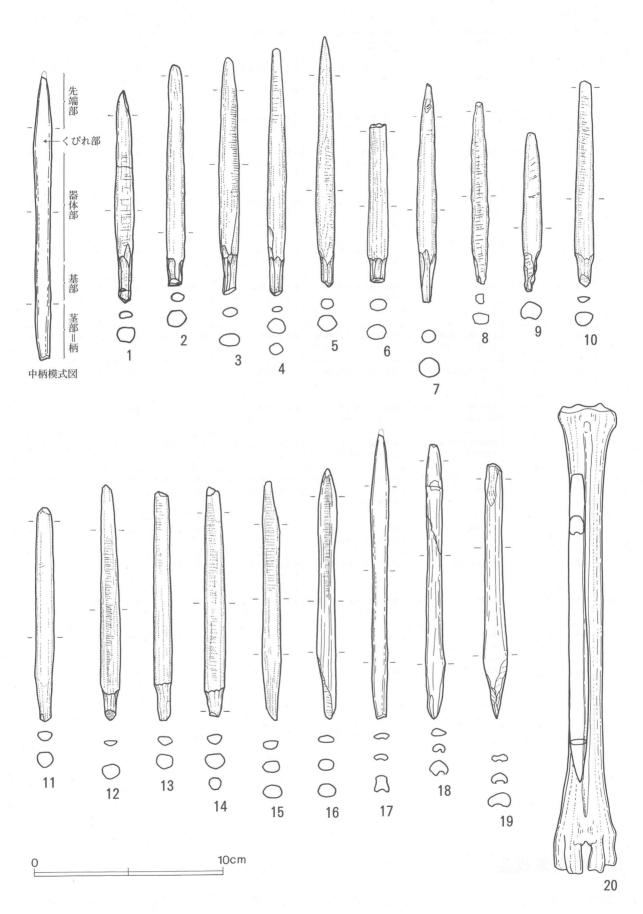


図 II-5 中柄 1-15:鯨骨製、16:鹿角製、 $17\sim19$ :シカ中足骨製 20:シカ中足骨から中柄を取る図

# 表Ⅱ-3 中柄

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	図II-5-1	113.0	先端を僅かに欠く。 先端厚3.0	全体に扁平製が強い。 中央径の巾×厚:8.4×6.0	最大幅はやや中央より。	やや粗削りの作 り。	鯨骨	S K-10	PL35-4
2	⊠ II — 5 — 2	117.2	先端を欠く。 先端厚3.6	断面はきれいな楕円形 中央径の巾×厚:9.3×8.3	最大巾は基部末端直前。 最大径の巾×厚:10.8× 9.0	短いがきれいな 作り	鯨骨	S K -10	PL35-27
3	図II — 5 — 3	126.8	先端を僅かに欠く。 巾×厚:4.7×0.6	全体に扁平製が強く粗製。 中央径の巾×厚:0.7×7.5	最大幅は後位。 巾×厚:12.0×8.2	やや粗い切断のまま。	鯨骨	SK-8	PL35-23
4	⊠ II − 5 − 4	128.9	先端は完存する。 巾×厚:4.7×2.5	きれいな楕円形を作る。 中央径の巾×厚:9.8×8.2	次第にすぼまり、最大径 はかなり前位。 巾×厚:10.4×8.6	やや粗い削り	鯨骨	S K - 8	PL35-19
5	⊠II - 5 - 5	132.6	先端は鋭く尖る。 厚さ2.7	やや粗い削りで完全な楕円 形ではない。 巾×厚:9.5×7.0	最大巾は前位。やや粗 い削り。 巾×厚:10.8×8.5	短く作る。	鯨骨	S J - 7	PL35-16
6	図Ⅱ-5-6	(85.3)	全く失う。	全体整形は最も整うもので ある。	最大巾は最後位。 巾×厚:11.0×9.4	短く作る。	鯨骨	S K - 9	PL35-14
7	⊠ II − 5 − 7	107.1	先端は尖っていたものらし い。	円味の加工が完全なもの。 巾×厚:10.5×10.8	最大径は後端にいく。 加工入念。 巾×厚:11.5×11.8	やや粗い削り	鯨骨	CW-2 (山本台地)	PL74-2
8	図Ⅱ-5-8	99.1	先端が僅かに損傷している。 巾×厚:5.0×4.6	四辺形断面。多少研摩痕。 中央径の巾×厚:9.5×7.4	最大径の巾×厚:9.8× 7.0	僅かにくびれる。	鯨骨	S K – 8	PL35-9
9	図Ⅱ-5-9	84.1	先端を僅かに欠損。 巾×厚:5.2×5.6	先端に向け、次第に細まる 形。	最大径は後端。 巾×厚:10.6×9.2	茎部ははっきり くびれる。	鯨骨	S J - 7	PL35-13
10		112.1	先端が鋭くとがり、断面は 僅かに扁平。	断面はやや角ばる。 巾×厚:8.0×8.8	最大径はやや前。 巾×厚:9.4×9.4	くびれは強くな い。	鯨骨	SK-8	PL33— 6
11	⊠ II − 5 −10	113.6	先端の扁平化が強い。 先端厚1.9	次第に扁平化する。 中央径の巾×厚:10.0×8.0*	巾をまし、厚さが加わる。 巾×厚:11.3×9.8	はっきりと茎を 作る。	鯨骨	S J - 7	PL35-2
12	<b>図Ⅱ</b> - 5 -11	127.2	やや厚い先端部。 先端厚4.6	市、厚さともに余り変化がない。 市×厚:9.0×7.5	多少巾や厚みがます。 巾×厚:9.8×9.0	研摩され次第に 細まる。	鯨骨	S 1 – 8	PL35-1
13	図II — 5 —12	122.6	薄い先端。Λ型に切れている。巾×厚:5.7×2	次第に扁平化する。 中央径の巾×厚:10.0×9.0	ほとんど円形となる。 巾×厚:10.5×11.0	明瞭にくびれた 部分あり。	鯨骨	SK-8	PL35-20
14	⊠II - 5 -13	111.8	先端部を欠損する。	次第に扁平化する。	多少扁平化が残る。 巾×厚:10.3×9.3	丁寧な茎をつくる。	鯨骨	S J - 8	PL35-24
15	図II - 5 -14	130.0	先端が折れている。	最大巾は中央よりもやや後 方。巾×厚:10.0×8.0	扁平化がのこる。 巾×厚:11.4×9.0	丁寧に茎をつくる。	鯨骨	S K – 8	PL35-25
16	図II — 5 —15	121.8	僅かに巾がひろがる。 巾×厚:-×4.8	僅かにくびれる。 巾×厚:8.6×6.4	巾広く厚みます。 巾×厚:10.7×7.8	丁寧な加工で次 第に細まる	鯨骨	SK-8	PL35-18
17	図Ⅱ-5-16	133.7	僅かに巾広く厚い。 巾×厚:10.2×5.3	僅かにくびれる。 巾×厚:8.7×6.3	著しく厚みがます。 巾×厚:-×9.5	特につくられて いない。	鹿角	SK-8	PL36-4
18	⊠II - 5 -17	152.6	幅広い断面。 巾×厚:10.0×3.5	はっきりと細まる。 巾×厚:8.0×4.0	巾やや広く厚みが著し い。巾×厚:9.0×9.0	次第に細まる。	シカ 中足骨	SK-7	PL36-2
19	図II − 5 −18	146.1	僅かに巾広く、薄い。 巾×厚:8.0×3.8	僅かにくびれる。 巾×厚:厚7.0×5.0	巾が広まり厚みも加わる。巾×厚:10.3×7.0	急に細まる。	シカ 中足骨	S J - 9	PL36-3
20	⊠ II — 5 —19	135.2	折れていて不明。	僅かにくびれる。 巾×厚:8.8×6.0	巾が著しく広まる。 巾×厚:12.4×7.8	鋭く尖らす。	シカ 中足骨	SK-8	PL36-1

# 5 中柄未成品

数多くの未成品が認められる。ここでは特徴的なもののみ解説し、他は一覧表と実測図の掲載のみとする。

## (1) 二重かさね鳥骨製の中柄未成品

図 $\Pi-6-1$ の1点のみ出土している。現長121.21、尺骨幅9.47、橈骨幅5.02である。アホウドリの左尺骨の骨体部分が使われている。近位骨端から骨体のほぼ3分の1の位置にある栄養孔が、製品の中央やや上部にあるので、近位骨端寄りの2分の1を使っていると推定される。製作はまず尺骨を現長に切断、髄腔内に橈骨を差し込み、同じ長さに切断、その後、尺骨の遠位部を斜めに切断して平たく尖鋭にし、反対側を柄とするために削りを入れている。全長は他の鯨骨製品とほぼ同じ長さである。現在の先端削り面と反面は大きく破損している。この製品の廃棄されたのは、この部分の破損があったためであろう。現在、挿入されている橈骨を引き抜くことができない位に埋めこまれている。この珍しい例は、桜井報文(1958)、神恵内観音2号で出土例がある。

# (2) アシカ腓骨の中柄未成品

図 $\Pi-6-2$ の1例が残されているのみである。左腓骨の骨体~遠位部を使う。遠位骨端は切断し、柄をつくるような切り込み切痕をみるが、切り込みは浅く、柄になるほどではない。骨体部分は裂き割ったままの状態である。中柄を製作する意図がうかがえるが、中途に終わっているのではないかと思われる。腓骨はそれ自体細みの骨体で、加工することによって中柄、刺突具などをつくることも可能であり、擦文時代の人もそう考えたのではないか。しかし、完成させなかったのは、素材として不的切なこと、例えば髄腔がひろく、骨質自体は薄いことが問題になったのかも知れない。なお、製品中に腓骨を使ったものを確認していないので、製作されることは少なかったのではないかと思われる。

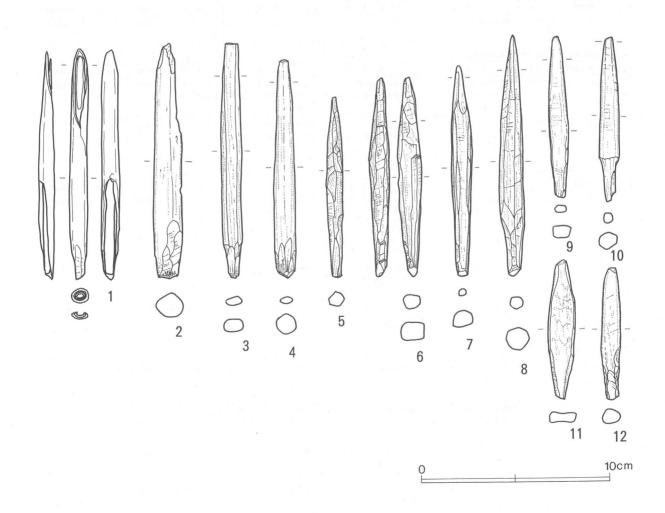
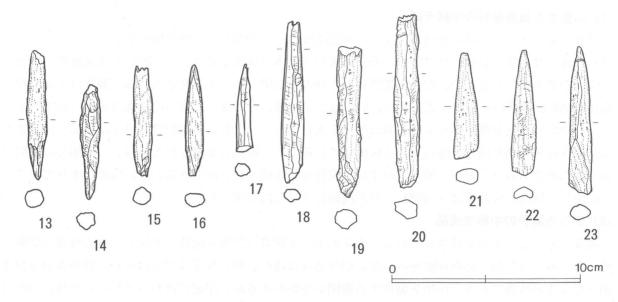


図 I - 6 中柄未成品(1)



図I-7 中柄未成品(2)

# 表 **II — 4 中柄未成品**(1) (1) 二重かさね鳥骨製中柄の未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	図Ⅱ-6-1	121.2	遠位端を斜めに切断。 巾×厚:9.5×6.3	未加工のまま。	使用時についた亀裂に より半面が裂ける。	折れて一部のみ を残す。	尺骨と 橈骨		

#### (2) アシカ腓骨製の中柄の未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	⊠ II − 6 − 2	123.0	切断面を残す。	巾×厚:13.9×12.2		切り込みを入れ 加工。	腓骨	SM-10	PL38-5

# (1) 先端部軸断面がV状を呈する中柄の未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	⊠ II − 6 − 3	126.2	特別の加工はなし。 巾×厚:7.0×4.0	切り裂いた面が残る。 中央径の巾×厚:11.0×7.0	切り裂いた面がそのま ま残る。中央径とほほ 同じ。		鯨骨	S J - 8	PL35-22
2	⊠ II − 6 − 4	117.7	扁平にさせる加工はなされ ている。 巾×厚: $5.5 \times 2.5$	次第に細まる。 中央径の巾×厚:9.6×10.2	茎部のくびれが、僅かに みられる程度。	かすかにみられる。	鯨骨	S J - 8	PL35-26

# (2) 長い形の中柄の未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材料	出土地点	図版編番号
1	図II − 6 − 5	95.9	粗い削りで、先は細まる。 巾×厚:3.0×3.3	粗い削りのままで中央部のみ 巾・厚さがある。 巾×厚:9.5×7.5	次第に細まる。	茎の加工はまだ 見られない。	鯨骨	S J - 7	PL35-10
2	⊠Ⅱ-6-6	106.3	粗い削りで先は細まる。	中央に最大巾・厚さがくる。 巾×厚:12.7×10.3	次第に細まる。		鯨骨	S K - 9	PL35-8
3	図Ⅱ-6-7	112.0	先端を特に細めている。	最大巾・厚さ前方にくる。 巾×厚:11.2×8.5	次第に細まる。	特別の加工はなし。	鯨骨	SK-7	PL35-3
4	⊠ II − 6 − 8	128.3	鋭く細くしている。	全体の形を整える削りあり。	最大径が後方にくる。 巾×厚:13.0×12.0	細くするため粗 削りがある。	鯨骨	S K - 7	PL35-21

# (3) 短い形の中柄の未成品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器体部	基部	茎 部	材料	出土地点	図版編番号
1	⊠ II − 6 − 9	86.9	一面を平らにする加工はあ るが、明瞭な研磨痕はなし。 厚2.7	明瞭な研磨痕はなし。	形をつくるが明瞭な研磨 痕はなく骨も裂いたまま の状態かもしれない。	やや細めた加工がある。	鯨骨	S J -10	PL37-1
2	⊠ II − 6 −10	84.9	研磨痕がみられない。 最先端径は巾×厚:5.6×5.0	断面不整四辺形のような形。 完形品としては表面が粗い。	器体部と同じような形。 巾×厚:10.8×10.0	骨の欠損部あり。	鯨骨	SK-9	PL37-2
3	⊠ II − 6 −11	70.0	少し欠けてはいるが、巾広 く、厚さもある。 巾×厚: 7.4×7.4	幅広い扁平な作りであるが、 両面は研磨された痕はない。 中央経は巾×厚:14.8×7.8	最大巾が上方にくる。	茎部への移行は 次第に細まる。	鯨骨	S J - 7	PL37-6
4	⊠ II — 6 —12	73.8	先端部のみやや巾せまく、 薄くさせる加工。 巾×厚: 5.5×3.8	研磨痕はみるが全体の形は 整っていない。 中央経は巾×厚:10.2×8.8	やや粗い加工が目立つ。	茎部は僅かに細まり、加工は粗い。	鯨骨	S J - 7	PL37-7

#### 表 II - 5 中柄未成品(2)

(4) 器体、茎などの加工部分はみられるもの

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基 部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	図Ⅱ-7-13	67.5	先端欠損。骨表面腐食のため加工痕不明。	凡その形は出来てくるが未 完成。	凡その形は出来ている が未完成。	基部を作るため の削り込みある。	鯨骨	S J - 7	PL37-8
2	図Ⅱ-7-14	61.1	粗い切断面のみ残す。	粗い削り痕のみ残す。 最大径の巾×厚:13.0×9.0	長い。粗い削りのみ残 す。		鯨骨	S K – 8	PL37-10
3	図Ⅱ-7-15	58.3	粗い切断痕のみ残す。	棒状に削り取られた状態。 中央経の巾×厚:9.5×8.5	器体部との区別不明。	僅かに細く削る。	鯨骨	S K - 8	PL37-12
4	図II − 7 −16	60.1	先端より基部にかけ、縦に 裂けているため、形状は不 明。	縦方向に細く削った痕はあ る。	縦方向に細く削った跡 はある。	かなり細く削る が茎部であるか は疑問。	鹿角	S J - 7	PL37-11
5			欠損部であるか先端部であ るか不明。かなり粗い加工。	鹿角表面の凹凸が残る。全 体に粗い加工。	欠損	欠損	鹿角		

#### (5) 茎などの特定部位の形が認められないもの

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	図 II − 7 −17	46.3	尖るように加工を施す。	切断痕のまま。器体の厚み は意識されている。 最大径の巾×厚:8.6×7.5	不明	不明	鯨骨	S J - 8	PL37-18
2			先端を意識した加工はなし。	削ったままの状態。	不明	不明	鯨骨		
3			両端が同じように尖るため、 先端を決め難い。	切断痕がそそまま残る。中 央径の巾×厚:8.0×9.0	全体が海綿質である。	先端部か基部か は不明。			
4	⊠II - 7 -18	86.0	先端部不明。	骨質は緻密質の部分を利用。 最大径の巾×厚:11.2×8.1	不明	不明		SK-7	PL37-3

#### (6) 棒状あるいは板状に加工された中柄未成品の可能性のある骨製品

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎 部	材料	出土地点	図版編番号
1			巾が広く扁平。	扁平な板状、断面は不正四 辺形。 最大径の巾×厚:13.5×8.5	不明	不明			
2	図II − 7 −19	91.9	先端部不明(一方には切断痕 あり)。	断面は四角形に近く、きれ いな面取りがなされる。 最大径の巾×厚:11.4×10.5	このままの長さである のかは不明。	不明		S J - 8	PL37-21
3	図II — 7 —20	80.6	先端部不明(一方に切断痕、 他方は折れる)。	縦方向に面を7面程となる。 最大径の巾×厚:11.5×10.4		不明		S K - 9	PL37-4

#### (7) 中柄の可能性のある不明骨角器

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器 体 部	基部	茎部	材質	出土地点	図版編番号
1	図Ⅱ-7-21	56.5	先端部欠損。	欠損。断面は楕円形。 最大径の巾×厚:8.0×12.7	不明	不明	鯨骨	S K - 9	PL37-13
2	図 II − 7 −22	66.2	先端は鋭く尖る。	器体が2つに割れる。 最大径の巾12.0	不明	不明	鯨骨	S K – 8	PL37-9
3	図 II − 7 −23	79.4	尖る。意味不明の刻みあり。	加工は均整とれ、頑丈なつ くり。断面楕円形 最大径の巾×厚:8.0×11.7	不明	不明	鯨骨	SK-8	PL38-2

# 6 銛頭と中柄

別に述べている銛頭の分類に従い、それに適合すると考えられる中柄の形態を述べる。

**第1類銛頭**:逆刺、鉄鏃を装入しない長い先をもち、やや短い器体と尾部をもつ。索溝部の形はご く浅いのとやや巾広の形がある。

〈中柄〉ソケットの巾狭い形には第1類の尖端のを細くした形の中柄がよく合うが、ソケットの巾は 多少広い製品もあるので、それに合う先端をもつ中柄もあったと思う。

第2類銛頭:逆刺をつけ、扁平なつくり。尾部にはその両側に刻みが装飾的につく。

〈中柄〉体部がうすいので、索溝は従って浅い。中柄の先端ができるだけ薄いものがよい。最適な型は第4類のへら状の断面をもつシカの中手・中足骨製品、あるいは楕円形断面をもつ、先端がごく薄くつくられている製品がよい。ソケットの底面が浅くレンズ状に凹む。この形の中柄先端の曲面は、ソケットの凹面形にぴったりである。

第3類銛頭:鹿角製で大形で、尾部の表面に菱形の線刻文がつく。鉄鏃が必ず挿入される。ソケットの巾は多様である。

〈中柄〉

- a 巾広く浅いソケットには楕円形断面をもつ中柄で、先に入ってやや細まる形もものがよい。
- b 巾広でやや深いソケットには楕円形断面の巾広形が合う。
- c 最も巾広く、且つかなり深いソケットをもつ大形の銛頭に合う中柄はないが鹿角製の幅広型の、 それに合うような製品があったのかもしれない。

**第4類銛頭(1)**:尾部が三叉し、体部の丸みが強い。ソケットがさらに深くなる。

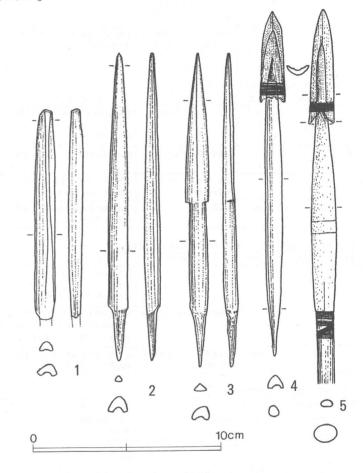
〈中柄〉

これに全く一致するものはない。しかし第4類とした中柄は、ほぼこれに適した製品と思われる。

**第4類銛頭(2)**:尾部三叉の例で、 ソケットの内径をさらに広くつくる例。 〈中柄〉

第1類の太い形の中柄(先端欠)は 上述のように銛頭と中柄の先端の形態 に一致点がみられ、この銛頭にふさわ しい中柄ではなかったかと思う。

以上にみた銛頭と中柄の先端の形態はよく一致するもので、実際の使用に当って、使い分けされていたのであろう。例えば肋骨製の比較的単純なつくりの銛頭に対しては、中柄もまた簡単なつくりのものが使われ、一方銛頭も、鉄製鏃をつけた製品を使う場合には、それに有効な中柄が使われていたはずである。



図Ⅱ-8 アイヌの人々の製品にみる鏃と中柄の装着方法

# アイヌの人々の製品にみる鏃と中柄の装着方法(図Ⅱ-8)

- 1 中柄 シカ中手もしくは中足骨後面の稜部を使う。先端が鈍いが断面三角、茎部破損し素材骨の自然面が残る製品。室蘭市絵鞆遺跡、アイヌ墳墓出土。室蘭市民俗資料館所蔵品。
- 2 中柄 シカ中足骨後面の稜部を使う。茎部を作り出しているのが特徴。室蘭市絵鞆遺跡A区 pit14号アイヌ墳墓出土 9 点のうち 1 点。同所蔵品。
- 3 中柄 上記中柄と同素材。先端部から器体部にかけ中央部に幅広く切り込みが入る。絵鞆遺跡出土。
- 4 鏃を装着した中柄 鏃は竹製、中柄はシカの中足骨後面の稜部を使う。鏃を留める糸は膠様のも ので固められている。市立函館博物館所蔵品。
- 5 鏃を装着した中柄 鏃は竹製、中柄は鯨骨、T. L46,3、15,5gr. 標本番号11126 (他に中柄部分がシカ中手もしくは中足骨製、木製のものがあり、鏃にも金属製のものがある)。北海道大学植物 関博物館所蔵品。

アイヌの人々によってつくられた弓矢の鏃、中柄の考古、民俗資料を調査した資料の一部である。

これらは沙流郡平取町二風谷遺跡で知られた近世墓出土品と同じ素材、形態をもつ。これらは擦文期 資料と比べて素材、形態上で共通した点が伺えると同時に、擦文期にはまた特徴的な形態があったと 考えられ、さらに地域差、時期差があったことが推測される。そして青苗貝塚での中柄には海獣骨製 が多いことが指摘されるが、それは海獣を対象とした狩猟が中心であったことによるものと思われる。

# 7 ヤス状刺突具

## (1) 鯨骨製

鋭く尖る先端をもつ製品を例示できるが、数は少ない。

1点のみである。全長は93.4mm、最大径9.5mmである。

断面略円形、単純な砲弾形で頑丈なつくりである。短い柄部がつく。前面の研摩はやや粗いが、摩 耗の痕跡もみられ、使われたことが推測される。

なお、鯨骨製の刺突具的な形態をした製品は他にもあるが、中柄として使用された可能性のあるものを除くと、幾つかの類例があげられるかと思われる。

# (2) 鉄製の先端部をもった刺突具

鯨骨製の長い柄の部分の先端に鉄製の鏃を装着したと考えられる。先端の根バサミ部分は多くが破損し、もちろん鉄鏃の残される例はない。柄のかたちで①~④の4タイプに分けられる。

- ① 膨らみをもつ先端部とややくびれる中間部、再び径を増す基部があって柄となる。ていねいに作り込まれている。先端に目釘穴はないので、差し込むだけであったが、鏃の底部がくびれるので、ある程度固定されたと考えられる。図 $\Pi-9-1 \cdot 2$ が該当する。
- ② 上記①の未成品で図II-9-3の1点のみである。全体の形がすでに作られている。未製品としては最終段階といえよう。
- ③ 先端に膨らみをもたないかたちで、①に比べて短い。このタイプのものに、根バサミ部分の残された例があり、それによると、幅は $1\,\mathrm{nm}$ である。図 $\Pi-9-4\sim6$ が該当する。
- ④ 鉄製のヤスを先にはめるもので、図II-9-10の1点あったのみである。全長61.6mm、210.1mmである。外形は鯨骨製の短い鏃形製品であるが、先端を深く抉り、鉄製のヤス先を挿入固定したと考えられる。スリット部分は長方形、周囲に鉄が付着する。短い柄がつくられ、固定されたことが推測される。

## 表Ⅱ-6 ヤス状刺突具

a 鯨	骨製								
番号	挿図番号	全長	先 端 部	器体部	基部	茎 部	材料	出土地点	図版編番号
1		93.4	研摩はやや粗い。摩耗痕あり。			短い。	鯨骨		
b 鉄	製の先端部をも	 った刺突	具						
番号	挿図番号	全長	先 端 部	器体部	基部	茎 部	材料	出土地点	図版編番号
2	⊠п-9-1	(92.6)	中間部より欠損。	折れているために詳細は不明。	太くなる。10.0×9.8。	ややきれいに削る。	鯨骨	SK-9	PL35-11
3	⊠II-9-2	104.2	僅かに巾が広がる。巾8.4	少しくびれる。巾×厚:8.0×8.0	太くなる。巾×厚:9.8×8.6	粗く削る。	鯨骨	SK-8	PL35-17
4	⊠II-9-3	143.5	先端はΛ状に角ばり、四辺形に面を 取る。中央径の巾×厚:5.5×2.5	断面が円形。中央径の巾×厚: 9.0×8.8	太くなる。 中央径の巾×厚:11.3×10.7	削られて細くなっ ている。	鯨骨	S J - 8	PL35-15
5	図Ⅱ-9-4	112.4	先端に向け、扁平になる。先 端厚2.3	扁平。中央径の巾×厚:8.8× 6.7	最も巾、厚さが増す。 巾×厚:10.4×9.0	短い茎が付く。	鯨骨	S J - 7	PL35-5
6	図Ⅱ-9-5	110.0	太形のつくり。先端径の巾× 厚:4.9×5.0	断面が丸みをもつ。中央径の 巾×厚:9.2×9.4	最大径は後端にくる。入念に加 工される。巾×厚:11.2×10.6	入念に加工される。	鯨骨	S K - 9	PL35-6
7	⊠п-9-6	105.1	巾が広がる。大半が欠損する。	僅かにくびれる。巾×厚:8.3 ×5.0	幅広く厚みあり。巾×厚: 10.2×8.9	やや粗く削りくび れる。	鯨骨	S J - 8	PL35-7
8	⊠II-9-7	130.3	先端部分欠損。巾7.5	くびれが弱い。巾×厚:8.4×7.8	太い。巾×厚:9.8×8.6	粗く削る。	鯨骨	SK-8	PL36-6
9	⊠п-9-8	109.8	先端部分欠損。巾8.0	くびれが弱い。巾×厚:8.4×7.5	太い。巾×厚:10.2×10.0	粗く削る。	鯨骨	S J - 8	PL36-7
10	⊠п-9-9	92.6	巾は広がらない。巾6.8	基部より先端に向け次第に細まる。	太い。巾×厚:10.5×10.0	ややきれいに削る。	鯨骨	SK-8	PL36-5
11			先端は不明。巾×厚:9.5×9.2	折れ口の部分で僅かにすぼむ。 巾×厚:9.2×9.5	太い。巾×厚:10/5×10.0	均等に削り込む。	鯨骨		
12	⊠π- 9-10	61.6	抉りが深く入る。	巾×厚:10.1×8.1	細くなる		鯨骨	SK-8	PL34-4

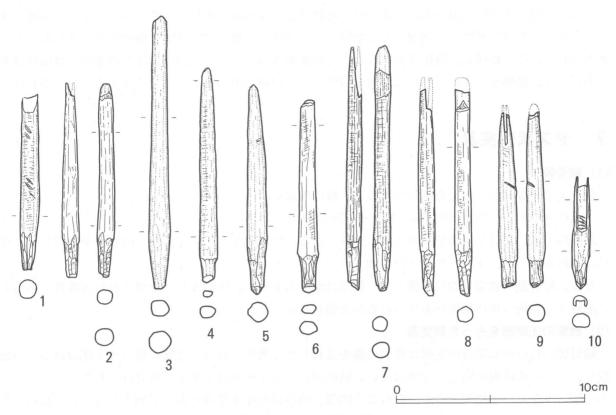


図 I - 9 ヤス状刺突具

# 8 鳥骨製骨針

アホウドリの橈骨製の針 2 点が出土している。先端の長い削ぎ面は金属刃によるものであろう。図 $\Pi-10-1$  は、全長107.90。一方の端に骨を輪切りにし、折った痕跡がみられる。全体に均等の幅がみられるので橈骨の骨体の中間部が使われているであろう先端は骨の遠位部で、当初からこの長さであったかはわからない切断は骨の幅広の平面を削ぐようにつけられている。図 $\Pi-10-2$  は、全長89.00である。上記例に比べると短い。一方の端に骨を輪切りにした折った痕跡をみる。先端の切断は図 $\Pi-10-1$ と同じ方法で、削ぐように切った痕跡がよくのこる。

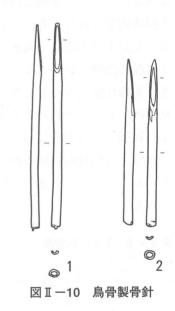


表 I - 7 鳥骨製骨針

番号	挿図番号	全長	先 端 部	器体部	基 部	茎 部	材質	出土地点	図版編番号
1	⊠ II -10-1	107.9	斜めに切断。鋭い先端となる。	巾×厚:5.4×4.6	末端に切断痕をみるのみ。	特別の加工はなし。	橈骨	CW-2 山本台地	PL74-4
2	⊠ II -10-2	89.0	斜めに切断。先端欠損。	一部に削り痕をみる。 巾×厚:4.0×3.5	末端に切断痕をみるのみ。	特別な加工はなし。	橈骨	S J - 7	PL34-13

# 9 有栓弭型鹿角製品

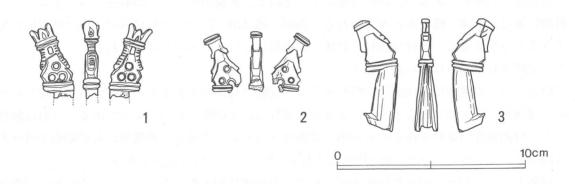
下記の 3 点が出土している。その形態から A (図 II-11-1 )と B (図 II-11-2 ・ 3 )に分類した。

図 $\Pi-11-1$ は、頂部は、花弁状の彫刻で構成されるが、大小4枚からなり、それぞれに小孔が開

けられている。表面はよく研摩され、極めて滑らかな光沢をもつのは、人手に触れる機会が多かったからであろう。この上端の下に二本の隆帯がつき、器体部となる。この部分はソケット部に対して40度の傾きをもつがこれは鹿角の傾きから得られる自然の傾きである。器体部は扁平な台形で、3つの大孔、長方形の孔側方の刻みなど、かなり複雑な彫刻が施されている。3つの孔は極めてきれいに開孔し、相接している。この部分は特に厚く作られ、ここに栓が付けられるとすれば、ある程度固定することができるであろう。孔はほぼ垂直に開けられている。ソケット部分はその根本から折れてない。この折損部分をみると、鹿角の海綿体部分にあたり、そのために弱かったと推測される。

図 $\Pi-11-2$ は、頂部は平らで2つの隆帯がめぐる。器体部は上記の例のように強く傾く。この部分の彫刻は上例と同じで、五角形を呈した部分が3枚縦に重なるようにして上に伸びるという独特の形を作る。一番下のものが厚みがあり、2段目、3段目と次第に厚みを減じてゆく、極めて入念なつくりといえよう。孔はもっとも厚い部分に開けられている。ソケット部分は上例同様全く同じケ所で折れている。折れ目をみると、器体部とソケットの繋ぎ部分が僅かに8.4mm しかなく、海綿体の部分に当っていたため極めて折れやすかったと考えられる。

図II-11-3は、完存しているものであるが、器体部に特徴的な3つの孔がみられず、未製品と考えられる。頂部はもっとも単純で浅い隆帯が刻まれているのみ。この隆帯の下に台形の形、さらに五角形の形が刻まれているのは上例と全く同じである。装飾的な刻みは少ないが、器体の上部の台形部分に縦と横方向の刻みがつく。ソケット部は完存し、良く研摩された平滑な面がみられ、その末端に突出する隆帯がつく。この隆帯はソケット部に軸部を挟んだ場合、固定するために巻いたベルトのずれるのを防いだものだったであろう。



図Ⅱ-11 有枠弭型鹿角製品

表 II - 8 有栓弭型鹿角製品

番号	挿図番号	分類	全長	頂・器体部	ソケット部	材質	出土地点	図版編番号
1	図Ⅱ-11- 1	A	30.9	長さ×巾×厚:29.8×14.6×6.9	欠損する	鹿角	SK-7	PL34-10
2	⊠ II -11- 2	В	37.7	長さ×巾×厚:35.5×16.0×7.7	欠損する	鹿角	SK-7	PL34- 9
3	⊠ II -11- 3	В	61.1	長さ×巾×厚:28.1×15.8×7.2	長さ×巾×厚:33.8×16.9×12.2	鹿角	S M 10	PL34-16

# 10 切断あるいは切り込み加工痕のある骨格について

#### (1) アシカ肋骨の加工と切断

本遺跡の主体獣類はアシカであるが、肋骨の出土が多い。一個体から得られる部位としては中手も しくは中足骨、指趾骨に次いで多いが、検出標本としては肋骨がもっとも多かった。おそらく意図的 に肋骨が居住地まで運ばれ、骨器製作の素材とされたからであろう。

#### a 肋骨の切断

海獣類の骨の中で切断痕が最もよくみられるのは肋骨である。これは肋骨が四肢骨にくらべて数が多いということもあったが、解体時に切断されたり、骨器製作のために切断されることが多かったことによるものと思われる。

#### ① 肋骨のほぼ中央のところでの切断

このことは、PL.116の1でみるほぼ完存する肋骨を標本として、図版  $9-1\sim5$  の近位部を残す 肋骨の長さはほぼ等しく、一方遠位部(下半部分)に当る図版  $9-7\cdot8$  は下端で折れているが、復元すればほぼ同じ位の長さになる。このようにほぼ中央のところを狙って切断しており、この切断法 は外側から切り込むのと、ある程度切り込んでおいてから、次に内側に折り込むといった方法をとっている。

#### ② 肋骨近位端部の切断

この部分に切断痕をみる標本はあまり多くはないと思われるが、図版 9-2 はその好例を示している。それによると切り込みの刃は肋骨小頭(上端関節部の末端)と肋骨結節(小頭の曲がる角)を結ぶ線と並行するように切っている。このことは肋骨を切断する際の一つの方法で、肋骨を胸椎から切り離すときに付いたものと考えられる。

このように肋骨を切り離すときの切断が、内側についているということは、肋骨が切られ、内蔵が取り出されたその上で切り込まれたからであろう。

#### b 肋骨にみる加工

#### ① ほぼ完存する肋骨にみられた加工(図版 9 - 6)

右肋骨の完存例であるが、近位骨端につく切痕と、前後両側につく切痕をみることができる。近位 骨端の傷は、解体の際のものと思われる。両側の傷は削り込むような切痕で、他の肋骨片にも共通し てみることができる。切痕は肋骨の骨体の中央部についているのが注目される。

#### ② 切断された肋骨にみられる加工

肋骨の多くの例では骨体部に切断痕をもつ。切断は骨体の中央やや下方の位置ではないかと思われる。図版  $9-7\sim10$ にみるように、2 度 3 度切りつけて切断しているようである。これは解体痕ではなく、骨器製作の素材を得るための第一段階とみられる。当然近位骨端側にも切断痕が残されており(図版  $9-1\sim5$ )、これの近位骨端には上記に述べたように切断痕がみられる。

図版  $9-11\cdot 12$ は、両端が切断され、その一方の側に加工痕がみられる。下方の遠位骨端側も粗く切断されるが、両側の加工は上位 3分の 2 である。下方は保持していた部分であったと思われる。切痕には  $3\sim 4$  mm幅の刃跡が連続してつき、その範囲は $10\sim 13$  c mに及ぶ。この加工は肋骨の側壁を削る作業で、銛頭の素材になる板をつくったのであろう。幅は16 mm前後まで削られているので、完成品の幅12 mmまでわずかである。この段階で肋骨を背腹面で割り、さらに平板な板とし、腹面にソケットを、背面に索溝を刻み、先端部の尖り、基部の角張るかたちがつくられ、銛頭の形態がつくられたはずである(図 $\Pi-3-1$ 例参照)。

#### c 海獣肋骨の縦半裁

肋骨を内外面に分かつように縦に裂いたものである。これは扁平な板ができるわけで、銛などの製作材料となったものであろう。

図版  $9-6 \cdot 12$ は肋骨の前後両側面を切るもので、骨器材料側面を削るといった加工と、その後に研摩しているものとがある。

#### (2) 鯨類の骨格にみる加工痕

鯨類の骨の多くに加工痕を見ることができた。切断の際に出る削りくずのようなものを入れると多量のものになるが、ここでは主として切断の際についた切り傷をもつ例を挙げて、加工状況について

ふれておく。

#### a 肋骨につく例

類例は多くないが、典型的な標本がある。PL.118-3がそれで、上端を輪切りにし、その中程に、金属製の刃を骨に直角に当てて切り込みをした痕がみられる。同じ方法で切断しようとしたのであろう。図版 9-13は、こうして切断したもので、それをさらに縦に打ち割っているものである。この長さは156.0である。PL.118-3の切り込みまでの長さがほぼ同じ位であるところをみると、この長さが、必要とされる一定の規格であったようである。

#### b 長方形に切られた鯨骨片

図版 9-14は上に述べた肋骨切断片とほぼ同じ長さのもので、これも意図的に長さが決められていたのものであろう。上下と両側を金属器で切断し、海綿体側はほぼ平らにされるなど、丹念に骨の面を削り取っている。こうして一定の長さの材が用意されてはじめて規格化された製品ができたと思われる。

#### c その他の小断片

図版  $9-15 \cdot 16$ は鯨骨を削り込んでゆく際、  $1 \sim 2$  度の削り込みで剥がした骨片である。金属器で木を削り込む際に剥離したものと形態上でほとんど変わらないので、ほぼ同じような刃物の使用によって出来たものであろう。木よりもずっと堅い骨をこのように剥離していることは、鋭利な鉄製の道具の使用がされたことが推測させる。 図版 9-18はその切り込み状態を示すものである。

#### d 鯨骨の切断加工

これには加工の状態で三つに分けられる。

- ① 図版  $9-17\sim19$ 。第 1 次加工ともいうべきもので、切断面が裂かれたり一面のみをもっているもの。つまり、大まかな切断加工である骨である。おそらく原材となるべき骨を、鉄製の刃器で幾つかに打ち割る際に出来た破片が多数あったのであろう。
- ② 細かい刀痕をもつ骨片(図版9-20・21)。

第 2 次加工は製品として形を見ることの出来ない骨片であるが、骨の一端あるいは一面に切断痕があり、加工調整の第 1 段階に属するものものの破片であろう。つまり原材を切断し、それに次ぐ製作工程に入ろうとする際のものである。

最大のものは、長さ180mm、厚さ30mm、巾35mm位のもの(PL.36-8)で表面はあまり手を加えていない。それでも細かい刃痕がたくさんあるところをみると、自然に手を加えて平らにしているのであろう。

裏の海綿質部でもまれに平らになるまで面取りしている。

③ 第 3 次加工。ここから意図的な加工がはじまる。骨全体にまだ原材の面が残るが、ある程度製作の意図を伺うことができる。図版 9-22がこれにあたる。

#### (3) 鹿角にみる加工痕

鹿角として出土したものは、すべて何らかの加工痕を持っているものであった。このうち 3 点(図版  $9-23\sim25$ )は鹿角の枝の分岐部であって、その上下に鋭利な刃物で切り付けられた傷が見られる。つまり、分岐部を挟んで上下を切断したものであって、鹿角の分岐部以外の幹部を利用したものの残片である。このことから棒状を呈した幹部が利用しやすかったことが分かる。この他の角片がほとんど見なかったのは角を極めて効率よく利用したからであろう。

枝 (図版 9-26)。上下に切断痕があり、表面に削った跡がある。銛頭の長さに一致する。

角幹 (図版 9-27): 角幹を二つに裂いたもの。上下に切断痕があり、さらにこれを 2 つに裂いている。この角片は角幹部ではあるが全体に丸みがなくむしろ扁平な感じが強い。このように扁平性の強い部分は、角幹でも分枝部に近く、且つ枝の分岐する側にみられる。この角片は枝の分岐する直下

で切られ、さらに縦に割り、そのうちの外側部分を切り取り、残った側の丸みの強いほうを残して、 これを角器製作の材料としたものと思われる。

# 第Ⅲ章 動物遺体

## 1 軟体動物門 Phylum Mollusca

(1) 腹足綱 Ciass Gastropoda

#### クロアワビorエゾアワビ

Haliotis discus discus or Haliotis discus hannai

アワビは本貝塚における主体貝種であって、しばしば広い範囲でブロックをなしている状況をみたが、特に多かったのはK-10からL-10に至る貝塚の東寄りにおいてであって、東の方から緩やかに傾斜する斜面上に敷きつめたようアワビが広がっていた。このような状況はおそらく貝塚の全面においてみられ、当発掘区の東の方に更に続きがあると推測される。貝層の厚さは確認されたものだけでも貝殻が数枚重なる程度であるから、特に厚いものではなかった。もっとも、これもここが貝層の外れであることから、別の地点では更に厚いアワビ層が埋存することも有り得よう。

採集されているアワビは、大小様々の大きさの殻が含まれ、特に殻を揃えて採ることはなかったようである。小さな殻は横径25.0mm、長さ35.0mm前後であったが数は少なく、50.0mm位からは漸次大きな殻に至るまでのものであり、大きな殻は最大140.0mmを越える(しかしこの程度のものは稀で、110.0mmが普通にみられた大型の殻であった)。

なお、アワビにはこれを採る際に突き刺した鉄製ヤスの四角い孔をみる。一辺4~5ミリの大きさで 普通は1孔であるが、2孔であることもあるらしい。孔は殻のほぼ中央から殻頂近くにつくことが多 くそこのあたりが狙う場所であったのであろう。

#### ユキノカサガイ Niveotectura pallida

かなり多量のものが含まれている。ただし、殻の完存するものよりも水磨を受けているものが多い。 **クボガイ** Chlorostoma lishkei

比較的目立った出土である。最大殻径32.0mmに達するものがあった。一般には27.0mm前後とみてよい。

#### コシダカガンガラ Omphalius rusticus

上記のクボガイに比べて少ないようである。採集標本1個。殼径22.8mm。

#### オオヘビガイ Serpulorbis imbricatus

稀である。採集標本1個は、殼径が8㎜前後の細く小さなものであった。

#### ツメタガイ Glosaulax didyma

稀である。採集標本1個。最大殼径40.8mmほどで、後方の月斉孔に近い位置に径4.5mmの大孔があき、食害された跡を残す。

#### ウラシマガイ Semicassis bisulcata persimilis

稀である。殻高 $48\times2/3\sim25\times2/3$ mm程度のものが数個採集されているに過ぎない。美しい貝であり、殻口などは独特の形をしているので、意識的に集められたと思われるが、特別の加工はみられない。

#### ヒレガイ Ceratostoma burnetti

稀である。2個を採集しているのみ。殼高46.0mm。

#### レイシガイ Thais bronni

多くはない。採集標本は2個。殻高45.4mmと36.6mm。

#### ヒメエゾボラ Neptunea arthritica

とくに目だったような出土ではない。殻高57.0mmと55.0mm。

#### バイ Babylonia japonica

レイシガイ同様に多くない。殻がやや薄いためか破損している標本が多い。またこれらの標本の殻 口周縁に摩滅がみられ、破損が採集以前にすでにあったようにも思われ、直接捕食のために採集した のではないのかもしれない。

#### (2) 二枚貝綱 Class Bivalvia

#### サルボウガイ Scapharca kagoshimensis

出土量は多くない。大型の殻で殻長62mm、殻高55.0mm。採集標本中には水磨を受けているものがある。

#### タマキガイ Glycymeris vestita

二枚貝中で最も多くの出土をみた種類である。大型の殻で殻長55.0mm、殻高52.0mm位であるが、稀で、多くは殻長40mm、殻高38mm位のものからさらに小さいものが多い。前述のようにタマキガイは出土量が多いが、貝層を形成するということはなく、また小さい殻が多い。しかも、その殻にはしばしば著しい水磨を受けたものが含まれ、全体としてみると食用として利用されたものはごく一部と考えられる。

#### イガイ Mytils corsucus

多くはない。

#### アカザラガイ Chlamys fareri akazara

殻長63.0mm、殻高67.0mm、アズマニシキガイの東北地方北部の形である。殻表の放射肋が全体に細く鱗状の突起もごく小さいものしかみることができない。

#### エゾキンチャク Swiftopecten swifti

稀である。

#### イタヤガイ Pecten albicans

稀である。左殻 2 個、右殻片 1 個、右殻中は水摩痕が見られる。左殻のものも殻頂の耳状をなす前耳、後耳の部分が摩滅しているのは、殻を利用したからであろう。

#### ホタテガイ Patinopecten yessoensis

大型の殻でもあり比較的目についた。破損した殻を含めればかなりの量になるのであろう。殻長58  $mm \times 3/21$ 、殻高58 $mm \times 3/2$  である。この貝も耳部を加工した例があり、左殻のもので殻の周囲と両耳側を削っているものがある。このようなものは実際はかなり利用されていたのではなかろうか。なおこの例では貝殻に何か特別の付着があるとか、あるいは変質しているとかいう状況を観察することはできなかった。

#### 陸産貝類

SL-10ベルト第 I 層の保存のよい魚骨層中に多数のパッラマイマイ(Discus pauper)を検出している。殻形は $4.5\sim1.0$ mm $_{+-}$ までのものを含み、この場所で繁殖していたことを示している。このことは、魚骨層の形成がこの貝の産卵期のピークと考えられる6月~冬眠に入る10月までに行われたことを推定させる。

#### ウチムラサキガイ Saxidomus purpuratus

比較的多かった種類であるが、殻は大きくても殻長76.0、殻高58ぐらいのものであり多くはさらに小さい殻長62mm、殻高48mm程であった。

#### エゾハマグリ Liocyma fluctuosum

ごく稀にみたのみである。

バカガイ Mactra chinesis

殼が薄く破損されやすい。

ミルクイ Tresus keenac?

小型のもの1個が採集されている。

# 2 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

エイ目 Rajiformes

尾棘が2点採集されているのみである。特に加工された痕跡は残していない。

## 3 硬骨魚綱 Class Osteichthyes

サケ科の一種 Salmonidae sp.indet.

出土量は極めて少ない。検出魚骨の全てをみているわけではないので問題は残るが、やはり全体量は少ないと推定される。

#### マダラ Gadus macrocephaius

本貝塚での主要な魚種で、カサゴ類に次ぐものである。多少の大小差はあるようで、前上顎骨で全長39mm位と標本が小さく、大きいもので51mmである。歯骨の方が変形が少ないので現生種との比較に都合よいが、現生種体長57cmのもので歯骨全長63.5mmである。貝塚産のは58.0mm位が多いのでやや小さい個体が多いことになろう。すべてマダラであって、スケソウはおそらく含まれてはいないと思われる。

#### フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae spp.indet.

最も多くの骨を出したものであって、本貝塚の魚骨のほとんどがカサゴによって占められていたと しても差し支えない状況であった。

大小の個体を含んでいるが、そのうち50%は体長31cm以上のもので、25%がその半分ぐらいの大きさ、残る25%がこれより小さいものとなるようである。

このように大小の個体を出土することは、この地域の沿岸にカサゴの好繁殖場があったからであって、これが主対象となったことも十分考えられることである。これらの大小が混在したような形で捉えられているけれども、それぞれの大きさのものを捕るときに、条件の差や違いがなかったのかどうか、あるいは実際に生息している状況ではどうかという事柄について、調べてみなくてはならないであろう。

#### アイナメ Hexagrammidae sp.indet.

アイナメに近似する標本である。本貝塚での小形の魚の主体種であって、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、主鰓蓋骨、椎体などの出土が多い。

標本は前上顎骨・歯骨によく見られ、体長30cm以上になるのが普通のようである。

アイナメ科の骨の中には現在多棲するホッケは全く見ることができないので、当時の魚類相が現在 とはかなり違っていたことを考えなければならないであろう。

#### カジカ科の一種 Cattidae sp.undet.

多くの種類のあるカジカであるので、今比較標本が十分ない中で種名の特定はかなり困難が伴うのであるが、標本を整理してみると、特に多種類をとっているわけではなさそうである。

#### ① ハリカジカ Prorocottus okadai

最も数が多いのは、ナベワリに近似したもので、標本の保存は良くないが、かなり大型のものが多

い。おそらく50cm以上になるものであろう。カジカ類には小さい個体は殆どみられない。

#### ② ギスカジカ Myoxocephalus stelleri

確認されたのは、大きな棘をもつ前鰓蓋骨と、その棘だけの破片である。この二つの棘はたまたま 筆者が検出したものの中に含まれていたもので、実際にこの程度しか含まれていないものであるかは 明らかではない。

#### カレイ科の一種 Pleuronectidae spp.indet.

カレイ類遺体の検出もあまり多くの部位骨で認めることができなかった。頭蓋など特徴的であって、これを検出するのは容易なのであるが、どのようなわけからか、これの残る例は極めて稀である。椎体と第一血管間棘が主で稀に歯骨がある。第一血管間棘は比較的大型のものが大部分。椎体では比較的大小がある。

#### 5 鳥綱 Class Aves

#### アビ類 Gavia sp.

出土量は多くない。確認出来た標本では、鳥口骨、尺骨、中手骨、各1点のみである。いずれも不完全な標本であるが、大きさから見て橈骨は最もおおきくハシジロアビに匹敵し、中手骨も大きい。 鳥口骨は小さく、シロエリオオハム位の大きさである。

#### カイツブリ類 Podiceps sp.

K-8ベルト第2層より左脛骨が検出している。

#### アホウドリ類 Diomedea sp.

多くの骨が出土するが、頭蓋骨は少ない。その他の四肢骨類の保存も良好とはいえない。上腕骨などは遺存するものはなかったし、僅かに尺骨1例、中足骨、指骨などが出土した。なお、PL.98の4の鳥口骨の下端に強く叩いた痕がありそれは内側にもある。

#### ウミウ Phalacrocorax filamentosuaと、ヒメウ Phalacrocorax pelegicus

ウの類として検出された鳥骨は鳥骨中最も多く、表中に示したもの以外にも多くの部分骨があるはずである。それらには、明らかにウミウと思われる大きさのものと、小形のヒメウに属するものがあった。ただ、標本の中には破損が著しく、この両種を区別することが必ずしも容易でない場合もあり、表中にそれを明らかに示すことはできなかった。

#### ガンカモ科の一種 Antatidae sp.

ガンカモ科の骨の出土はごく少ない。標本中の上腕骨近位端は小さく、コガモと変わらない。鳥口骨、尺骨、橈骨そして中手骨はより大きく、中形ガモ程度のものである。

#### ワシタカ目の一種 Accipitridae sp.indet.

末節骨1個である。かなり大きなもので、おそらくワシ類のものであろう。多くの骨の中からこの種のものと思われる骨は唯1個を得たのみであった。

#### チドリ科の一種 Caradriidae sp.indet.

大形のチドリ科の上腕骨と思われる。ケリ位の大きさのものかと思われる。カモメ類に近似する形態であるが、近位端の形態が異なる。

#### カモメ科の一種 Laridae sp.indet.

良好な標本がない。この種の鳥の埋存が少ないようである。脛骨と第三指骨があるが、すべておなじ科であるとは決めかねる。もし、カモメ類とすれば、大小のものが含まれており、指骨および脛骨、中足骨の大きいのはセグロカモメ級の骨であろうかと思われ、細い脛骨(PL.101の12)はカモメ、ウミネコなどと推定される。

#### ウミカラスの一種 Uria sp.

大型の尺骨と上腕骨が出土している。これも極めて数の限られたものである。おそらく同じ個体の ものであろう。

#### 6 哺乳綱 Class Mammalia

#### シカ Cevus nippon yezoensis

獣骨中、海獣骨を除くと、陸獣としてシカとイヌがあるだけである。鹿角以外はシカは四肢骨として上腕骨遠位端部と完存する橈骨、尺骨を得ただけである。

鹿角は銛や他の材料として貴重であり、その断片が出土している。いずれも切断の痕跡をその角片の上下にもつもので、何らかの手が加えられているものであった。そのうち3点は角枝の分岐部分であり、枝や幹部の上下を切り落としたあとのものである。このように見ると、やはりこの部分には角器の材料としては扱い難いものであったのであろう。かなりの量の獣骨の中にあって、シカ骨が僅かに2点のみであったということは、この島に若干シカが生息していたとしても、捕獲することがなかったということが考えられよう。

#### オットセイ Callorhinus ursinus

アシカを除く鰭脚類でやや目立ったのはオットセイであるが、その数は決して多くはない。しかも、そのすべてが雌の成・若獣であった。標本として採集されたのは、歯は1個で顎骨などは採集されていない。四肢骨では上腕骨と寛骨、大腿骨という部分があった。その他の部分もあるかもしれないが、小破片になっている場合にはあるいは見落としているかもしれない。上腕骨は、多くが成獣骨であって、若い個体が多数を占めていた。

オットセイの上腕骨は、アシカ類に比べてかなり小さく、この点でも区別が容易であるが、全体の 形のよく似ている中で、特に三角筋粗面の形が特徴的であり、アシカに比べて巾が狭く、うすい。また、遠位端の外側の尺側上顆稜が強く発達して一段がつくのを、若い個体でも見分けることができる。

大腿骨は雌の場合、特に細く華奢である。

#### ニホンアシカ Zalophus californianus japonicus

本貝塚で最も多く出土した獣であり、その量は他の獣のどの種類よりもはるかに多いものであった。 従って、獣の狩猟はほとんどこのアシカを対象としたものであったということができる。遺体はほと んど全ての骨格を含むが、中でも次のような諸骨が保存良く、また、個体数などを知るうえで重要で あった。

#### ① 頭蓋

別に述べているようにほぼ完存する頭蓋がかつて出土しているが、今回の調査では、それがかなり 広い範囲であったにも関わらず、そのような頭蓋を検出することができず、すべて破損となったもの のみであった。

そのうちの幾つかを図版編の PL.104に示したが、部分的には各部位が残っていたが、目についたのは、中央稜部分があり、雄のよく成長したものであった。その部分は高さ40.0mmに達しており、それが  $2 \sim 3$  位に打ち剥がれていたものであって、また、頭蓋の前頭骨、頭頂骨などがすべて欠けているところをみると、かなり徹底的に頭蓋を割っており、このために側頭部なども左右に分離してしまう状況であったようである。その状況は PL104 の  $4 \sim 7$  などによく見るところであって、側頭骨などの頭蓋部分は殆ど骨も残さない状況であった。上顎骨も破損したらしく、顎骨が完存するような例はなかった。

#### ② 下顎骨

保存のよい例があるが、ここで採集されたものは雌とみられる成獣骨は1点もなく、顎骨はすべて

雄のものであった。この他に遊離した歯が多数あることから実際には下顎骨があったはずであるが、 標本としては見ることはできなかった。

#### ③ 肩甲骨

多くは破損しており、関節窩から肩甲頸部分を残す破片となっていることが多い。稀に肩甲頸部で切断したものがあり、単なる解体処理のためでないかもしれないものがある(PL.106)。

#### ④ 上腕骨

最も多くの標本を得ている。幼体から若(亜成獣)、成体までの標本が含まれ、保存も良好である ことから、標本数も多くなったものと思われる。ただ近位骨端までを残す完全標本は少なかった。肩 関節を外すときに壊されることが多かったのである。♂成体の遠位骨端幅88.0mmに達していた。

#### ⑤ 橈骨

破損される率の低い部位で、上腕骨に次ぎ、尺骨とほぼ同じ標本が保存されていた。成体骨格で全長227.0mm前後である。近位端骨端の外れた全長100.0mm前後の標本も多く、 $1\sim1.5$ 歳前後の個体と推定される。

#### ⑥ 尺骨

この骨の保存状態も良好であった。近遠位骨端の完存する標本はほとんどなかったが、充分に成育した個体と思われる標本をみることができた。数量的には若い個体が圧倒的に多い。幼体最大長122.8mm前後。

#### ⑦ 寛骨

完存する標本は少なかったが、寛骨臼周辺を残す標本は多くみられた。やはり幼体標本が多かった。

#### ⑧ 大腿骨

標本がやや少なくなる。幼体標本が少ないのは、骨格自体が小さくなり、失われるようなこともあったのかもしれない。 $\nearrow$ 成体大腿骨全長132.8mm、143.9mm。幼体標本の完存標本では、最大長62.8  $\sim$ 76.5mm。

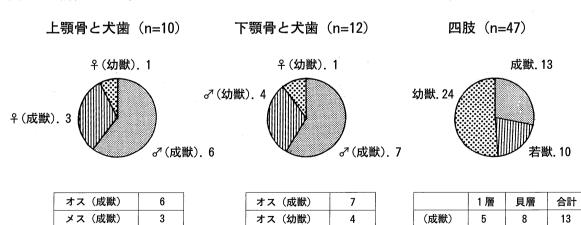
#### 9 脛骨

成体個体の標本数は、他の部位と大きく変わらないが。成体♂は全長258.0mm前後、幼体標本は、 最大長62.8~76.5mmである。

#### 10 踵骨

全長68.0mm前後である。

メス(幼獣)



図Ⅲ-1 青苗貝塚出土のアシカ最小出土個体数の出土量 (四肢で幼獣が多くなるのは標本が多いからであるが、これが一般的傾向である)

メス(幼獣)

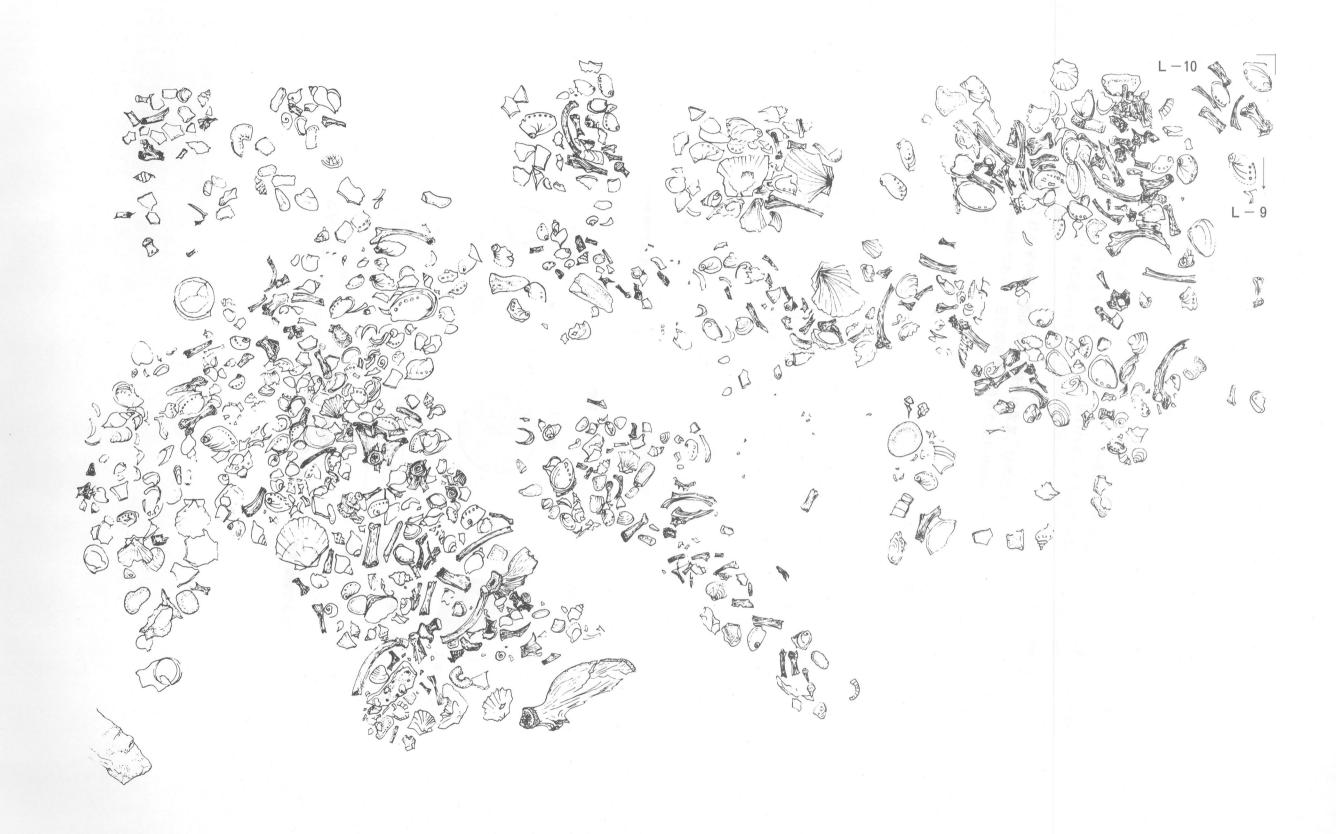
(若獣)

(幼獣)

7

10

24



図Ⅲ-2 動物遺体分布図(L-10区)

表Ⅲ-1 魚骨集計表

							サ	ゴ	類					Ι			k ·	, ,	<u></u> ケ							カ	ジ	カ	類					l	- 4	 7			$\neg$
		前士	顎骨	± F	題呂	_				前鰓	- 医丹	主観	巻 骨	前主	額骨	_	_		 i骨	<b>主</b> 艇	蓋骨	前上	額骨	丰上	.顎骨				節骨	前鰓	藩骨	主鰓	蓋骨	前主	顎骨	主上	顎骨		骨
	ł	R	L	R	,	R	_	R	_	R	L	R	L	R	L	R	_		L		L	R		R	L		L	R		R	L	R	L	R	L	R	L		L
I-7			F		1	-	-		1		_		Ε.				F	-																					
J-7 第		2				6	3	1		3	6	2	2													1		1			1					1			1
	2層	1 25	28	6 35	31	2 47	3 42	16	18	1	56 31	24	20	3	1	1 5	3	.7	5	1	2	4	5	1		1 2	8	3	2	2 4	10			3	3	2	2	5	5
貝	層	3	3	4	5	1	1		1	3	2						1																			L			لــــا
計		31	31	45	40	56	49	17	19	51	44	26	26	-3	1	6	4	7	5	1	2	4	5	1		4	9	4	2	6	11	_		3	3	3	2	5	6
	1層 2層 3層	2 19	1 27	3 49	1 2 45	2 44	2 5 41	2 24	19	2 1 35	3 5 54	1 1 27	1 20	1	1		1	1 2	1	1	1	10	1 13			1 10	1 17	1 3	4	1 11	1 1 8	1		1	2	4	1	1	1
貝	層	8	9	15	12	ــــــ	7	5	8	14	11	8	7	2	1	1	1		1		1	2	1	1		2	2	2		1	3	L.	1			_			1
計		29	37	67	60	62	55	31	27	52	73	37	37	3	3	1	3	3	2	1	2	12	_	1	<u> </u>	13		6	4	13	13	1	1	1	2	4	1	1	2
	1層	6	1 5	1	2 2	4	3	1 1 2	1 4	3 5 5	1 1 2	1	3			1	1	1				2	3			1	1		1		2			1	1		1	1	1
計		6	6	1	4	6	7	4	5	13	4	3	4			1	1	1				2	3			1	2		2		1			1	1		1	1	1
1	1層	2 4 1	3	9 12	1 18 2	10 1	2 9 2	2 3 1	2 8	2 17 1	1 10 3	3 2	5 2 3		1	1 1 1	1		1			1 2				2	1	2	2		1			3 2 1	1	1	2	4 2	4
	/=	7	4	21	21	11	13	6	10	20	14	5	10	_	1	3	1		1		-	3				2	1	2	2	-	1	_	-	6	1	1	2	6	4
K-8 第	1層	6	6	1	2	4	3	1		3	2		1				1				_	1		1							1								
第	- 1	19 14 1	12 11	16 7 2	17 12 1	20 5 1	17 7 1	15 8 1	5 6	15 12	19 13 1	10 10	14 4 3	1		1	1	1	1 1	2	4	5	1 2			4 2 1	2	2 2 1	2 2 1	2 2 2	2			2	3	1	2	4 3 1	4 2 2
計		40	29	26	32	30	28	25	11	30	35	20	23	3		1	2	1	4	2	4	8	3	1		7	6	5	5	6	4			4	3	2	2	8	8
K-9 第	1層	1 3	8	2 2	6	6	4 3		3 2	2 4	1 6	1	2			1	2		1				1			1	1	1						3	1	1			
計		4	13	4	6	13	7		5	6	7	1	2			1	2		1				1			1	1	1						3	1	1			
K-10 第	1層	1	1 1		2		1	2	2	1						1		1								-								1	1			1	
計		1	2		2		1	3	2	1	-					1		1													-			1	1			1	
L-10 貝	層	6	7	6	5	8	8	6	4	11	8	2	2	2	1	2	4	2	2	1	1	5	1	2		1	2	2	Г	2	2			3	2	1	1	7	4
M-10 第 貝	1層	2	2	. 2	2	3	3	3	1 2	2	3	1				1		1	1									1	1	1			-	2				1	1 1
計		3	2	2	3	4	6	3	3	3	3	2		$\vdash$		1		1	1		-			=			_	1	1	1		-		3				1	2
<u> </u>	計	15	19	14	8	23	21	12		17	14	9	12		2	4	3	3	1	Г		2	4	1		4	2	4		1	3			5	1	1	2	7	2
第2層	計	20	2	25	23	22	25	16	6	26	30	12	18	2	1	2			2			5		1		6	7	3	3	5	5			3	4	1	3	4	5
第3層	計	62	69	104	106	106	97	51	51	104	108	63	56	5	1	7	5	10	7	4	7		_			14	_	8	10	17	19	1		6	5	7	3	11	2
総計	t	121	114	168	168	182	166	89	82	176	180	94	102	7	5	14	10	14	14	4	7	27	25	3		28	39	17	15	26	31	1	1	20	12	10	8	23	13

表Ⅲ-2 鳥類集計表-アホウドリ類

,	切歯骨	胸骨	鳥口	]骨		上腕骨		橈骨		尺	骨				中手骨	ŀ		大朋	退骨		脛骨			中足骨	
			R	L	I	3	L	R	. F	2	I			.R		]	L	R	L	]	3	L	I	ξ.	L
			dis	dis	dis	s	s	pro	pro	. s	dis	S	pro	dis	s	dis	s	s	s	dis	s	s	dis	s	S
I-7 第1層									1																ļ
J-7 第1層																			1		1				ĺ
第 3 層 貝層	ĺ				1 2				1		1 1			1			ĺ			İ					1
																	L				1				1
計						3					2			1	I		· ·		1		1				1
J-8 第3層 貝層	1			1	1	1	-					1										1	-		
計	1			1	:	3					1		-									. 1			
K-7 第1層 第3層																	1								
計								7.7								2	2								
K-8 第1層 第2層							1				-									1			1	1	
第 2 層 第 3 層 貝層				1			1	1		1					1	1	1			1			1	1	1
計				1			1	1	I					1		2	L2			- :	2		:	3	1
K-9 第2層 貝層												1						1							
計																		1							
K-10			1																						
L-10																			1						
M-10													1	1											
計														2					-						
第1層 計									1							1	l		1	1	l		1		
第2層 計				1			1				1			2									1		
第3層 計	1								2		2					2				1					1
総計	1		1	2	(	3	1	1	3		4	ļ		4		4	1 .	1	2	- 8	}	1			2

表Ⅲ-3 鳥類集計表一ウの類

	切歯骨	歯	骨		鳥		骨		Т	上	A	şii.	骨	Т	i	堯	1		Т		尺		骨		Ι	中	手	Ξ,	骨	Т	寛骨	_	-	大航	退骨		Т		恥	骨		T	中是	足官	П
1 1	2311173		L	_	R	Ŧ	I		t	R			L	+	R	_	_	L	+	F		T	L		T	R	Ť		L	Ť	,,,,		R		_	L	$^{\dagger}$	F		ΤÏ	L		R		L
						s pi	rodi	s s	pro	dis	s	pro	dis	s pr	odis	s	pro	dis :	s p	orod:	is s	3 p	rodi	s s	pro	dis	s	pro	dis :	s		pro	dis	s	prod	is	s pi	rodi	is s	pro	dis	s	oro	s	s
J-7 第1層				Î	_	1	T		1	1				Ť	T	T			Ť		1		$\top$	T	Ħ		1	Ī		1					1		Ť		T	П		1	T	T	٦
第2層				ŀ		1													1									.		1														-	
第3層					- 1	1 :	1 1	2	1		1	3	2			1		. :	1		1	L		ĺ			1			2	2	1		2	1	:	2   1	1	1			2	- 1	1	
貝層						- 1:	1			1						L.			$\perp$					1						1				-		╧	$\perp$	$\perp$	1			$\perp$		┙	╛
計					3		5			4		L.,	5		1		L,	1	4	- 2	2	$\perp$	_ 1		L.	3			3	$\perp$	2	L,	2			4	1	2	2	<u> </u>	3		1	4	_
J-8 第1層						1								1.																							1	1							
第 3 層		1				1		4			1					1					1	l		1							2							.   .							
貝層				Ш	_	1		1	L			1	2	1					4		L	$\downarrow$	2		Ш		4			4		Ш		4	Ш		1 1			┦	Ļ	2	丄	4	1
計		1			3	$\perp$	5	_	L	3		L.,	6	$\perp$		_			4	1	_	4	3	_	<u> </u>		_			4	2	Ь,		_		1	4	5	· 	$\vdash$	2			4	1
J-9 第1層						1		١.		2		2				l		i			1	L				1								1		1		١.							
第2層					- 1			1					1			1										ĺ		- 1		1				- 1								- 1		ı	
第3層							ı																	i	Ш														1						1
貝層				Щ	┵	+	Т,		┝	Ļ	_	1	$\perp$	-	_	L	Ш	_L	+	Ц,		+			H	1			1	4.	1	ш	1	-		1	+	1	Ш.	Н		+	$\perp$	+	4
計				-r	1	+	1	_	-	2			3	+	т -	_	Н		+	1	ι	+	1	1	Н	_	1	Т		+	1	Н		1		1 1 T	+	Τ,	_	Н	$\overline{}$	+	$\neg$	+	$\dashv$
K-7 第1層 第2層						1		1	1				1										1				1			1				1		١.			1						-
第3層					-	1		1	1	1			-					-		1		ı	-							.	1							1	1		1	1			
東 5 暦 貝層					- 1	1		1	1	1			1 :	ı	1						1		1			- 1		ı		1						İ		1	1		1	1	1		
計		Н	Н		3	1	1 2	۰	$\vdash$	3	-		3	+		L	$\square$		+			+	2		Н	1	$\dashv$		2	+	1	Н	1	+		+	+	3	1_	Н	2	+		+	$\dashv$
K-8 第1層				Т	_	1	<del></del>	Т	1	1	-	$\neg$	1 :	+	1	Т	$\neg$	Т	+	$\overline{}$	Т	$^{+}$	Т"	Т	1	Ť	-+	Т	ŤT	+	•	Н		1		Ť	+	1		1		1	1	十	┪
第2層			1		- 1	3		1	1				1	`	1	2			1		1						1			,				3	1			-	2		- 1	4	ı	- 1	3
第3層	1		1			4		1	1	3			1 :		1	٦							1	1	1	- 1	1			- 1	1			1			1	1 1	- 1	1	1			Į	1
貝層	1				- 1	2		1	1			1	1:			1					2	١,	1 -	1			1				-			1		اا	- 1		2		-		1	- 1	1
計	2	$\vdash$	1	1	1	+			H	8	_		8	+	4				$^{\dagger}$		_	+	3	_		3	7		3	$^{\dagger}$	1	Η'	6	7		2	+	- 8		Г	11	_	3	+	4
K-9 第1層			Ť	T	_	1	T	1	H	$\dot{\Box}$		2	2 1	ī	Ť		П	Т	T	T	Τ	Ť	T	Τ	İΠ	Π	7	1	1	ı İ	1	П		7	T	]		1	1	1		7	T	†	1
第2層						1	1					- 1	1		1		1	1	ı   :	1				1	H		2							Í					1			- [		1	
貝層						1		1		2	i	1	1				1	1	ι]:	1 1	.   1		2		1		1					1		2		1	1		3	1	1		1	1   :	1
#t					2	1	4			2			8		1		-	4	T	4	!	T	3			4			2	T	1		3	7		2	Т	6			3		1	1	2
K-10					T								$\Box$		$\Box$				1		L						J	J	$\perp$	I						Τ	Ι					1	$\perp$	I	_]
計														T																							$\perp$			L.	1			l	
L-10	1			1						1		1	1	Ĺ						1	I		$\perp$		1				1		1					_ 2	;	$\perp$					1	<del>-</del>	1
計	1				1					1			2							1						1			1		1				_ ;	2	$\perp$			<u> </u>			- 1	-	1
M-10					];	2	1					1		1	1		$\perp$	1		1																1	4		1	L		$\perp$	1		1
計					2		_ 1						1		2			1	1	1		L					$\perp$			$\perp$				_	:	[	╧	_ 1	_	Ļ.,		_	1	]	Ц
N-10							L		1		1								L			1			Ш		$\perp$		$\perp$	1					$\perp$		4	L	1_	1		4	丄	4	4
計										2				L					$\perp$			$\perp$	_ 1				4			1				_			1			<u> </u>	1	4		4	$\perp$
第1層 計					6		2			6			10	L					1	2		$\perp$	1			4	1		1	1	1		3			_	$\downarrow$	6	_	<u></u>	4	$\perp$	1	1	
第2層 計			1		6	$\perp$	4			2			3	1	4			2	1			1	1			4	4		2	1			3	4			1	4		<u></u>	7	4	1	4	3
第3層 計	1	1			7	1_	10		L	11			12_	<u> </u>	1			1	1	2		$\perp$	3			3	$\perp$		4	1	6		3	_			1	5		<u>_</u>	6	$\perp$	1	4	4
総計	3	1	1	2	6		20	1	L	25		- :	36		8			6		12	2		14			13	$\perp$		10	$\perp$	10		13		1	4	$\perp$	26	3		23		7	5	9

<sup>※</sup> pro:遠位端、dis:近位端、s:骨体

表Ⅲ一4 アシカ類骨集計表(幼獣)

		頭蓋	上碧	頭骨	下颚	預骨	上顎	犬歯	下顎	犬歯	環椎	軸椎	肩F	甲骨	上胳	饱骨	橈	骨	尺	骨	寛	骨	大服	退骨	脛	骨	踵	骨	距	骨
			R	L	R	L	R	L	R	L			R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
J-7	第1層														1	2	1			1	1				1	. 1		1		
	貝層	-							1					. 1	3	5		1	4			2	3	1	3	1				
J-8	第1層																									1				
	貝層				1								3	1			3	1	3		2	3	1	1	2	1				
J-9	第1層																													
	貝層									1	1				1							1								
K-7	第1層							1						2	1	1		1	1	2			2	1						
	貝層										1		2		1	3		2		1				1			1	<u> </u>		
K-8	第1層													. 1		1		1		1	1							_	<u> </u>	1
	貝層			1	2								3	·4		1	3	2	6	1	2	4	1	1	1	1		1	Ĺ	1
K-9	第1層														1	1			1	1		1	1	1		1		ļ		
	貝層				1										4	2	2			3	5	1				4			2	
K-10	第1層																						1							<u> </u>
	貝層													1		2		2	1		1	1	3	2	1				1 .	-
L-8•9	第1層		L											·									_					1		
	貝層															-													_	
L-10	第1層												1			1	1	1				ļ						_	_	<u> </u>
	貝層				1	<u></u>								2	2	5	3	2		3	1	3	3	3	1					_
M-9	第1層													2								<u></u>		-				-		ļ .
	具層										_						1				-							_	_	-
M-10	第1層			_	<u> </u>	ļ		_					1	_	<u> </u>	1		1	ļ		3	<u> </u>	1	2	1	-			1	-
				L			ļ		<u></u>	_				1			<u>.</u>		_			ļ	4					-	-1	1
N-10	第1層			<u> </u>	_	_									_			_								1		-		-
	貝層		_	<u> </u>		_								_	_	_	_	_		_	-	ļ.,	_	-	-	<u> </u>	_	2		1
	層合計		<u> </u>			_		1	_		<u> </u>		3	5	3	6	2	3	2	5	5	1	5	4	2	4	1	-	4	1
	<b>喜合計</b>		_	1	5	<u> </u>	<u> </u>		1	1	2		8	9	11	18	12	9	14	8	11	15	15	9	8	7	1	1	<u> </u>	2
総	計			1	5	1		1	1	1	2		11	14	14	24	14	12	16	13	16	16	20	13	10	11	1	3	4	_ Z

表Ⅲ-5 アシカ類骨集計表(若獣)

		頭蓋	上	質骨	下颚	預骨	上顎	犬歯	下顎	犬歯	環椎	軸椎	肩目	甲骨	上胞	制	模	骨	尺	.骨	寛	骨	大服	剧骨	脛	骨	踵	骨	距	骨
-			R	L	R	L	R	L	R	L			R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
.I-7	第1層			-										1	1			1	1		1									
	貝層								1		2			2	1		1		2	1					2		1			
J-8	第1層																		-											
	貝層																	1					1	1	1				_	L
J-9	第1層																													ļ.,
	貝層					1				1						1		2		_								_		L
K-7	第1層					<u></u>																								H
	貝層				1						1														1					-
K-8	第1層											_	-				1		_										-	1
	貝層			1							_				_	1	1	5	1	1		1		1			_		_	H
K-9	第1層 貝層		-												2	1			1	1		1		1		1				┝
							_	-							1	-			1	1						1				H
K-10	第1層 貝層					_								_	,1			_	1						_					H
			-	_													-		2								_			H
-8•9	第1層 貝層		-															_												T
T 10			<u> </u>	_										_		1														T
T-10	第1層 貝層		<del> </del>	-															1					1						Г
M-9	第1層		<u> </u>																											Г
141-0	貝層																								1					
√r-10	第1層													1																
	貝層																													
N-10	第1層																													L
	貝層																													
第1	層合計													2	4	2	1	1	5	1	1	1	<u> </u>	1					-	:
貝	<b>層合計</b>			1	1	1			1	1	3			2	1	2	2	.8	4	3			1	2	5	1	1	-	<u> </u>	1
総	計			1	1	1			1	1	3			4	5	4	3	9	9	4	1	1	1	3	5	1	1			1

表Ⅲ-6 アシカ類骨集計表(成獣)

		頭蓋	Ŀ	.顎	下	顎	上顎	大歯	下顎	大歯	環椎	軸椎	肩	甲骨	上	施骨	槙	骨	R	骨	寛	.骨	大	退骨	頸	骨	選	骨	路	骨
			R	L	R	L	R	L	R	L			R.	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
J-7	第1層												1		1							1	1	1	1			1		
	貝層				2						3		2				4	1			1		1	1	- 1	1	2		1	3
J-8	第1層							-													1		1					1		
	貝層				2								2	1		1		1	1	1	1		2	2		2	1	2	1	
J-9	第1層																													
	貝層										,1					2		3			1	1	2			2				1
K-7	第1層				-											1						1		1						1
ļ	貝層										1			1				1	2					2		1	1		1	
K-8	第1層												1											3		1				1
	貝層				1								1	2		1				1	1	1	1	1		1	2	1		1
K-9	第1層					_							2						1	2	3						2			
	貝層									1			1	1	ļ	1			2	4	1	2			2	1		1		
K-10	第1層 貝層		1																		1		1			ļ	1			
					ļ																1		1		3		1			
L-8•9	第1層 貝層																	1						-			1			
										-	1			1		1								1						
L-10	第1層 貝層		1	1					_		1		1	1		1			2				1	1	1					H
34.0			1	1									1			1	-						1	1						1
IVI-9	第1層 貝層												1												1					-
M-10	第1層																													
*AT-TO	貝層		1																				1			1				
N-10	第1層												1							2						-,				
1, 10	貝層																								-				7	
第1	層合計		1								1		6	1	2	2		1	1	5	5	2	3	5	1	1	5	2		2
貝層	合計		2	1	5					1	5		7	6		7	4	6	7	6	6	4	9	8	8	8	7	4	3	5
			3	1	5					1	6		13	7	2	9	4	7	8	11	11	6	12	13	9	9	12	6	3	7

表Ⅲ-7 アシカ類骨集計表(全体)

		頭蓋	L	顎骨		顎骨	[ gwz	(犬歯	1598	小小小	環椎	arts bitte	肩	田舎	FF	施骨	±4	骨		骨	5##	(骨	+	退骨	Hzz	骨	pas	骨	DE	骨
		現益	R	L	R	L	R	L	R	L	JR7H:	平田 作出	R R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
			K	L	+	<u>                                   </u>	K	L	K	L		_	-	-	-		+	<del> </del> -				-	-			-	K	-	K	+
J-7	第1層 貝層				2						-		3	2	3	2	1	1	2	1	3	2	1	3	2	1	_	2	<del>L</del>	L
		2			3		2	2	2		5	3	2	2	4	5	6	2	6	1	1	2	4	2	6	2	2		1	3
J-8	第1層 貝層	1			-			_					<u> </u>		1			-	ļ.,		1		1	<u>.</u>		1.		1	<u>_</u>	├-
		10			2		2	5			3	2	5	4		1	3	. 3	4	6	6	3	4	4	3	2	1	2	3	1
J-9	第1層 貝層	1	-							1							<u> </u>						_						_	<u> </u>
		1	-			1	1	1		2	2	ļ	1		1	3	-	5	<u> </u>		1	2	2			2			<u> </u>	1
K-7	第1層 貝層			1				1			1			2	1	2		1	1	2		1	2	2		_			<u> </u>	1
-			-1		1						3		2	1	1	3		3	3	1				3	1	1	2		1	L
K-8	第1層	1	1								1		1	1		1	1	1	1	1	1			3		1				_
		- 2	3	3	3	1					1		4	6		3	4	7	6	3	3	.5	2	2	1	2	2	2	1	2
K-9	第1層												2		3	2			2	4	3	-2	1	1		1	2			L
-	貝層				2					1		1	1	2	.4	3	2		3	8	6	3		1	2	6		1	2	_
K-10	第1層	1		.1											1						1		2				1			1
	貝層		1											1		2		2	3		2	1	3	2	4		1		1	
L-8•9	第1層									1	1			. 1				1		1							1	1	Ш	L
	貝層																							1						
L-10	第1層										1		1	1		3	1	1	1					1	2					
	貝層		3	3	1								1	- 2	2	6	3	2	2	3	1	3	4	5	2				Ш	
M-9	第1層												1	2																1
	貝層																1								2				لــــا	
M-10	第1層				1								2	1		1		1			3		1		1			3		Ŀ
	貝層	1	1								1			1									5			1			1.	1
N-10	第1層			1				1					1							2						1	1			
	貝層																													Ĺ
第1月	層合計	4	1	1	3			1		2	4		11	10	9	10	3	6	7	11	12	5	8	10	5	5	5	7		3
貝層	合計	16	9	9	12	2	5	8	2	3	15	6	16	19	12	28	19	24	27	23	20	19	24	20	21	16	8	5	10	8
総	計	20	10	10	15	2	- 5	9	2	5	19	6	27	29	21	38	22	30	34	34	32	24	32	20	26	21	13	12	10	11

# 第Ⅳ章 まとめ

## 1 青苗貝塚の動物遺体の特徴と擦文人の経済活動について

青苗貝塚の動物骨を特徴づけるものの一つに、アシカがある。すでに述べているように、本遺跡からは多数の骨が出土し、その中には雄雌、幼若成の様々な年齢階層のものが含まれ、この近くの水域に繁殖生息したアシカを捕獲していたことが考えられる。

遺跡から出土した生活の道具の中で銛頭あるいはそれに付属する骨角器が主体を占めていたことも、 青苗貝塚をつくった人々の生業のなかで、アシカ猟が主要な位置を占めていたことを示すものであろう。

アシカは肉・毛皮が主要な利用部分となったはずであるが、犬歯に穿孔して垂飾品としているものもある。アシカの頭蓋は例外なくうち割られており、脳髄食の行われていたことを示している。かつて、札幌西高校で発掘調査した際、アシカの頭蓋の両側に穿孔されたものが7個集積していたという。その状況は、例えばオホーツク文化人によるクマ、シカ、イルカ、その他の海獣類などの頭蓋集積と同じではなかったかと言われている。もし、そうであるとすれば、ここに生活した人々の文化的な性格を考える上で重要な示唆を与えるものがあるであろう。生活の主要な資源を彼らがアシカより得ていたとすれば、アシカに対しての何らかの狩猟儀礼的なものがあったのは当然と思われる。ただ、今回の調査の場合には、それがかなり広い範囲であったにもかかわらず、そうした頭蓋集積的なものが全く見ることができず(頭蓋はすべて著しく破損し、脳髄摘出の加工があったことのみ認めた)、頭蓋集積について具体的な在り方を確認し得なかったのは残念であった。

次に、陸獣類については、それらがいずれも数が少ないことはすでに述べた。陸獣猟は、この島では殆ど行われなかったと見てよいであろう。この点は、同じ島の遺跡の場合でも、オホーック文化の場合で、キッネなどの捕獲をしているのと対照的である。このことはまた、本貝塚からイヌの遺体を殆ど出土しないことと関連しよう。狩猟民にとってイヌは大変重要な家畜であったからである。

もちろん、僅かではあるがイヌの骨の出土は確認されているので、イヌがいたことは事実であろうが、青苗貝塚をつくった人々の生活には、直接的には関わりがなかったと思われる。

この点においてもまた、オホーツク文化の遺跡例の、礼文島香深井遺跡と著しい対照を示すものである。香深井遺跡の調査では多数出土したイヌの遺体には明らかに食用にされた痕跡を残すものがあった。おそらく、それは食料の乏しい冬季の食料に当てられ、毛皮などに利用されたのであろう。ところが、同じような条件下にあると考えられる奥尻島の青苗貝塚の場合は、イヌをほとんど見なかったのであるから、イヌを使っての陸獣猟もなく、また、食用にすることもなかったと考えられる。このことは同じ島嶼部の生活においてもオホーツク文化と擦文文化との間におおきな差異があること、それも本質的な経済基盤の違いがあったのではないかと思うのである。おそらく擦文文化期の人々は、この島の生活を自然の条件に応じて季節的に利用し、さらにより安定した生活条件があったのではなかろうか。それは別に述べるような、交易による物質の調達によって裏付けされたものがあったのであろう。いずれにしても、その基盤の一つをつくったのは海獣猟であったと考えられる。こうした差異を一層興味あるものとして示すのは、奥尻島のほぼ対岸位置にある瀬田内チャシ跡遺跡より出土した動物遺体との比較であろう。瀬棚町、北檜山町にまたがって存在するこの遺跡の発掘調査によって、その性格がしだいに解明されつつあるが、そこからは、かなりの量の動物遺体が発見され、その概要が報告されている。それによると獣骨にはエゾシカ、イヌ、ヒグマ、トド、アシカ類が多く、なかで

図IV-1 青苗・香深井・オンネモト・瀬棚内チャシ貝塚の脊椎動物遺骸の最小個体数比較表

鱼類

	- "	遺跡名	青	苗	香深井	(Ⅲ層)	オンネ	<b>キモト</b>	瀬棚内	チャシ
種類			個数体	%	個数体	%	個数体	%	個数体	%
=	シ	ン			47,770	51.8			39	37.9
カ	サ	ゴ	194	66.4	8,540	10.4	6	4.8	16	15.5
ホッ~	ケ・アイ	イナメ -	16	5.5	15,530	19.0	1	0.8	7	6.8
カ	ジカ	類	42	14.4			22	17.6		
マダラ	(コマイを	:含む)	27	9.2	3,,990	4.9	30	24.0		
カ	レイ	類	13	4.5	6,070	7.4	66	48.0	1	1.0
ウ	グ	1							25	24.3
そ	の	他							15	14.6

#### 鳥類

ア	ホ	ウ	۴	IJ	6	9.4	11	19.2	23	28.8	1	7.1
ウ				類	34	33.1	15	26.3	47	58.8	4	28.9
ウ		ガ	ラ	ス	3	4.7	17	29.8				
ワ	シ.	· 9	カ	類	1	1.6	2	1.8			4	28.6
そ		の		他	20	31.3	12	21.1	10	12.5	5	35.7

#### 哺乳類

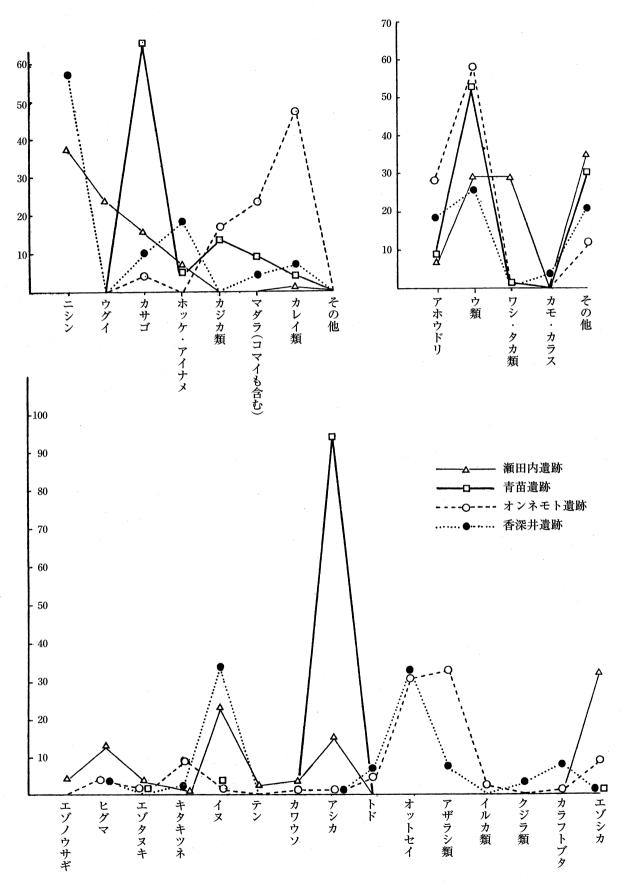
用北头	<b>A</b>									
エ	ゾノウサ	ギ					2	0.9	6	4.5
Ł	グ	マ			4	3.1	8	3.9	18	13.6
エ	ゾタヌ	+	1	1.4			3	1.5	5	3.8
+	タ キ ツ	ネ			3	2.4	19	9.3	2	1.5
イ		ヌ	2	2.8	45	35.4	3	1.5	32	23.5
テ		ン・							3	2.3
力	ワ ウ	ソ					1	0.5	4	3.0
ア	シ	カ	64	94.1	1	0.8	3	1.5	20	15.2
٢		ド			8	6.3	10	4.9	. 20	10.4
オ	ットセ	1			42	33.1	64	31.4		
ア	ザ ラ	シ			9	7.1	68	33.3		
イ	ル・	カ					4	2.0		
ク	ジ ラ	類	1.		4	3.2				
力	ラ フ ト	豚			10	7.9	1	0.5		
エ	ゾシ	力	1	1.4	1	0.8	18	8.8	43	32.5

も、シカ、イヌ、ヒグマが多かった点は、青苗貝塚と対照的であったと言えよう。しかも、イヌは食べられていた形跡があったというのである。ほぼ16世紀といわれるこのチャシ跡出土の動物遺体の状況と直接関係づけて論ずることはできないが、その形成に関わった人が残したものであるに相違なかろう。にもかかわらず、このような差異が見られたのは島嶼と本土というべき条件からの違いとみてよいであろう。もし、この青苗貝塚がここに年間を通して長く住み着いた人々によって形成された遺跡であったならば、例えばイヌの飼育や屠殺も行われていたであろうし、骨角器の材料となった鹿角などもさらに多く出土するのではなかろうか。そうした様相が見られないのは、青苗貝塚をつくった人々の生活がやはり季節的なものであったからであろう。冬には本土に帰り、そこで冬を越し、翌年のために道具を用意したり生活の準備をして島に渡ったと推測される。その時期は、アシカが繁殖のために集まる春から夏にかけてではなかったろうか。

勿論、このあいだ、アシカ猟にあたると同時に、アワビの採取あるいはその他漁業に従事したのであろう。

青苗貝塚の魚種は、主体となる魚が殆どカサゴ類に限られている。先述の瀬棚内チャシの例ではカサゴ類の他にニシン、ウグイ類、ホッケ、サケ類も多い。青苗貝塚でニシンやサケ類をみないのは、ここに住んだ居住期間とニシンの回遊期とがずれているということも考えられよう。

青苗貝塚の主要な漁業の対象は魚ではカサゴ類であり、おそらく彼らの食料源の一つになったであ



図IV-1 青苗(擦文期)・香深井・オンネモト・(オホーツク)・瀬田内チャシ(17世紀) における脊椎動物遺体の最小個体数比較図

ろう。貝殻ではアワビが大量に捕れており、これは瀬棚内チャシ跡遺跡あるいは上之国勝山館跡の貝塚、その他、アワビを主体とする貝塚は、擦文期及びそれ以降の時期の特徴といえる。

以上、青苗貝塚の動物遺体にみる主要な採集・捕獲活動について述べてきた。これらの動物遺体の示す青苗貝塚の経済活動は、特定の貝類、獣類を目的とした捕獲活動が中心となり、それは交易品としての価値が当時あったからに他ならないからであろう。

アシカ類は、肉はおそらく彼等の食料となったであろうし、また、犬歯に穿孔して垂飾とするようなことも行われた。しかし、この犬歯垂飾品は、多くのアシカが捕獲され、素材があったにもかかわらず加工品は極めて少ない。これは当時既に、こうした垂飾品の意義が失われてしかったからに他ならない。捕獲したアシカと人間との直接的な結びつきが失われ、あるいは装飾品としてさらに関心のそそられる品物が別に出来てしまったからであろう。

アシカ類の毛皮、油、アワビの干し貝は、この島でのもっとも重要な産物であったろう。ワシ類の骨もあることから、矢羽根となる鷲羽がとられたことも推測できる。また、昆布などの海藻類の採られたことはもちろんであろう。

青苗貝塚をつくった人々の生活は、島においては基本的に採集、狩猟、漁撈に依存するものであったが、本島においてはある程度農耕に従事する人であったと考えられる。このような経済的な基盤の上にあって、これらの人々が積極的かつ広範に進めていたのは、これらの資源を交易として流通させることであったと思う。このような資源が、これを多産しない地域において極めて価値のあるものであることは既により早くから知られていたと考えられる。擦文文化の成立とその展開は、この北辺地域に新しい交易文化圏を形成させながら、品物だけではなくおそらく人々もまた動き、その先々であらたな文化接触を誘発させることもあったのであろうし、そのような文化の様相を青苗貝塚にみてみた。擦文文化の経済的基盤を、単純に狩猟、漁撈と一部に行われた原始的な農耕よりなるといった単純な図式的説明では、事実を把握しえないことは言うまでもない。しかし、これを考古学的に解明してゆくにはなお、明らかにされていない比較資料との検討が必要である。例えば、本遺跡を考えるうえで重要な、積丹半島神恵内村観音洞窟の資料もその一つであるし、太平洋側の虻田郡豊浦町小幌洞窟の資料も動物遺体については知られる内容がきわめて限られる。小幌洞窟資料については、遺物についての調査、再検討を進めており、これらの成果をまって、改めて青苗貝塚の文化の問題も触れたいと考えている。

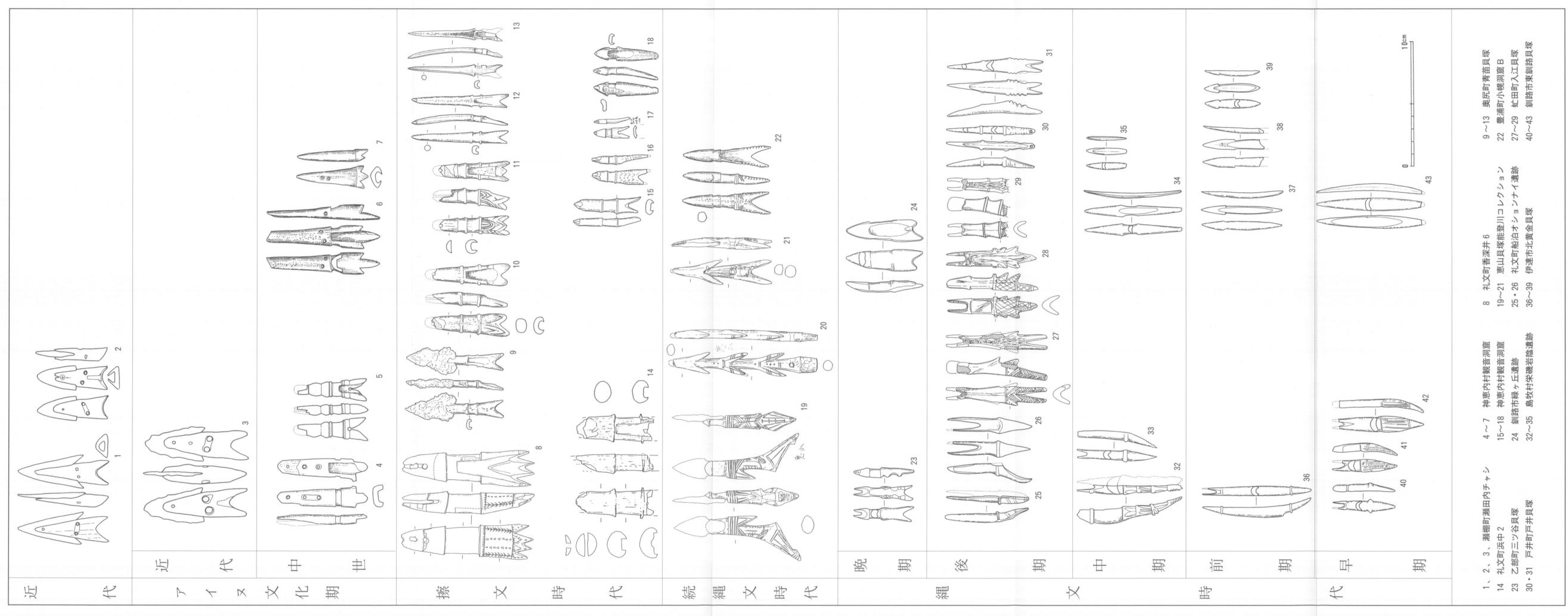
# 2 青苗貝塚銛頭の形態的特徴とその系譜

#### はじめに

筆者は骨角製品の研究で、その形態の考察の基礎に、素材と製作技術、工程の研究が重要であることを常に述べてきた。それは時代と地域を問わずに問題とされる部分であったと思う。青苗貝塚の骨角製品を述べるに当ってもこの点について留意してゆきたい。先に銛頭については、その分類を行ったが、また視点を変えてその特徴を論じてみたい。

#### (1) 北海道における銛頭の概要

北海道古代の重要骨角製品の一つに銛頭があるが、この製品は、機能的には銛としての用途を備えた効果的な道具として、早くから登場し、以後形態変化をつづけた。これについてはかつて1972年に行われた北海道島牧村栄磯岩陰遺跡の調査の発掘資料に基ずき、石器時代の形態変遷の試論を述べた



ことがある。筆者はこれより早く釧路市東釧路貝塚の調査に関わり、動物遺体の調査とともに、骨角製品の分類、考察を行ってきた。東釧路貝塚の銛頭は早期にもかかわらず、開窩式銛頭の形態をつくり、根バサミをつくり、尾部に線刻を施す入念さであった。海獣類肋骨は素材となり、特有の形態を作り出していた。前期の北黄金貝塚例は豊富なオットセイの遺体の出土を反映して、優れた形態の銛頭を作り出している。それはこの種の製品のたどり着いた頂点の一つであった。これにも地方差があるらしい。

この形態が以後どのように展開するのか、図りがたい謎であったが、それを教えてくれたのが栄み 岩陰洞窟の資料であった。この洞窟資料は空白部分であった中期と、晩期初頭期の資料を提示し、空 白を埋めた。栄磯岩陰の装飾彫刻をつける大形銛頭はその前後に類品をみない。この銛頭は鹿角製で あることに大きな関心をもったのである。

後期の銛頭の内容は近年の規模の大きな発掘で多くの資料をえている。虻田町入江貝塚例は優美な製品を作りだし、ひときは目立つ。ここで略述することはできない程の内容であり、もっとも華やかな製作であった。これまでの柳葉形から柳葉・長先端型ができ、根バサミの発達と多分岐尾部における線刻の発達が特徴的である。また、礼文島オションナイ遺跡その他にみられた大形根バサミをもつ銛頭は形態的にも特徴的である。これらの多くが鹿角製であることを確認している。この段階に銛頭の新しい変化がみられるようになる。

晩期から続縄文にかけて、さらにまた新たな変化が見られるようである。閉窩式で根バサミをもち、 器体全体に線刻を発達させる形態のものと、同様に線刻を発達させる有孔単純銛頭系の製品が特徴的 である。この銛頭にも地方形があり変遷の過程が異なるようである。

やや異常のように発達した続縄文期の銛頭は、その後の文化の中になにも残すものがなかった。石 器時代の銛頭製作の文化がこれで終焉したかどうかはなお問題であるが、擦文期にいたって銛頭製作 に労力を傾注した人々がいた。その中心にあったのが青苗貝塚とともにあった人々であった。

擦文期の青苗貝塚の人々によって製作された骨角製品は、海獣犬歯に穿孔した垂飾品、針類などがあったが、それらはごく少なく、銛頭の製作に専念したようである。従ってその製作された個数は多く、またその製作はすぐれた技法をもち、群を抜く存在になったのではないかと思う。素材と銛頭の形態が一体化し、効果を高めたのである。そして、このことが奥尻島周辺の発達した岩礁地形海岸や狩猟環境と無関係でなかったことは勿論である。

#### (2) 青苗貝塚の銛頭

銛頭の基本形はすべて開窩式で構成されていた。しかし、実際の製作、使用に当っては、素材の使い分け、効果を考えていたようである。

- I アシカ肋骨製の銛頭(1~3)
- a やや華奢ともいえる細く長い先端部と2叉する尾部をもつ。この形態は縄文時代後期にさかのぼり、2叉する尾部も時折はみられたが、先端部の長い柳葉形は擦文期銛頭において定着化し、青苗貝塚において精美された形態を作りだし、さらに装飾的効果も意識してつくられた。
- b 逆刺をつける1例があるが、均整のとれたつくりである。この製品の尾部両側には細かな刻みを つけ装飾的である。

#### Ⅱ 鹿角製

半裁鹿角枝をつかう

① 長い先端部と2叉する尾部をもつ(4~6)。

基本の形態はIのアシカ肋骨製品と変わらないが、はるかに厚みをもち、索溝は深い。既述のように柳葉・長先端型は縄文時代後期に例があるが、擦文期の青苗貝塚例は形態的に安定して優美なつく

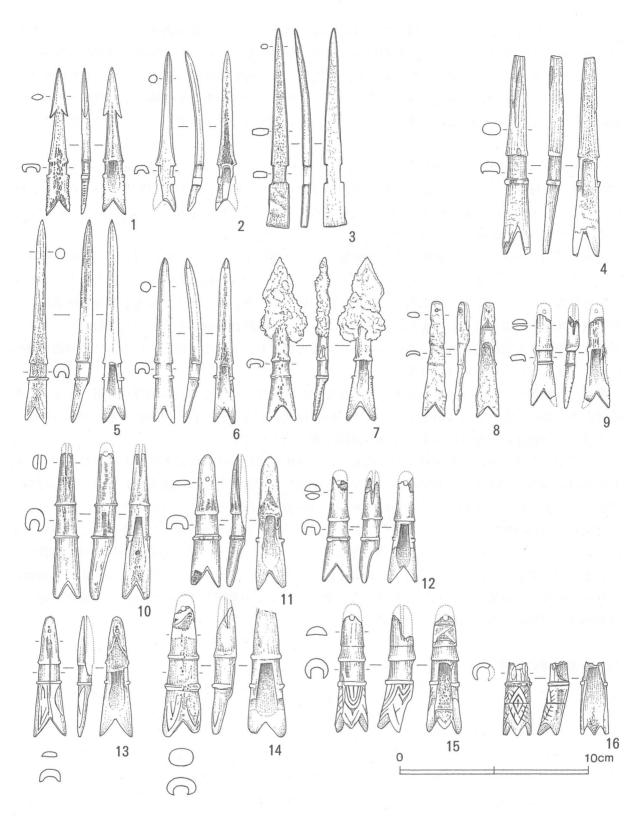


図 N-3 青苗貝塚出土の銛頭(1~13海獣肋骨製、4~16鹿角製)

#### りである。

- ② 鉄の銛先刃をつけ、尾部は2叉
- a 全長60cm前後:器体細めで華奢なつくり(7~9)。
- b 全長70 c m前後:幅広く、尾部に線刻することがある(10~12)。
- ③ 鹿角枝をそのまま使う
- a 尾部が2叉(13~14)。

#### b 尾部が3叉(15・16)。

開窩式ではあるが深いソケットがつくられ、安定した銛頭の保持によって、銛頭の獲物への刺突と 保持を容易にした。そして、最も効果ある銛頭としての価値を複雑な線刻文様に示したのである。

以上が青苗貝塚の銛頭の形態分類の基本についての筆者の考えである。この擦文期終末の製品-あくまでこれは道南地域における擦文文化ににる銛頭の一例であるが-が成立するためにはそれ以前の続縄文期以来の、また、オホーツク文化の製品との関わりも考えられるところである。さらに擦文期以降アイヌ文化成立過程における銛頭の形態の変遷も研究の課題である。これらの資料について修正され、問題の整理が行われ、論議されているが、種市幸生氏によって全道的な視野のなかで丹念な研究が発表されている。したがって、いま改めて論述することはさけて、筆者がこの報文を製作していた1980年頃、同志社大学において実測した神恵内観音洞窟出土の資料をもとに編年表なども作っていたのでそれに続縄文期の例を加え、参考とするべき表を提示し、多少説明を加えることにした。

# 3. 青苗貝塚出土の有栓弭型骨角製品について

有栓弭型骨角製品あるいは弭型有栓骨角製品と呼ばれる製品が青苗貝塚からは3点出土している。この時期の1遺跡からの出土量としてはもっとも多い。調査面積の広いことを考えると3点は特例というわけではなかったかと思われるが、この種の製品がここで作られ使用されたことに興味を覚えるのである。3点の製品は細部では形態の異なった点があるにしても、基本的には共通の形態をもつものであった。やや内傾した三角形の頂部に栓を埋め込む穿孔が、また、三角三点に配列するのは形態的にも利に適った存り方といえよう。ところでこの骨角製品に付属すると考えられる栓は2点とも残されておらず、また、検出することもできなかった。

先にも述べたように、3点は共通した形態をもつが、1点(A)は微細なな彫刻の施されるもので、これほどの彫刻を持ち製品は他には見ず、異国的といえる風情である。そしてまた、こうした彫刻を必要とした道具とは何であったのかと考えるのである。他に2点(B)は実に簡素なつくりであるが、頂部から重なるような積み上げ彫刻は、一種の重量感をつくりだしている。1点は完成品で、他の1点は未製品と思われる。穿孔された2例は器体部を欠損するが、未穿孔品は器体部を完存、全体の形をうかがうことができ、穿孔されている2例も同じ形の器体部であったろう。

さて、青苗貝塚の製品に系統を引くと考えられる製品が、道東地域でも出土している。網走地区の 広瀬遺跡の1例、さらに東の斜里オタフク岩遺跡の2例である。これらが青苗貝塚のB類の系統であ ることは明らかであり、青苗貝塚のやや簡素化した製品であろう。ところでこの種の製品が、アイヌ 文化のなかにどのように見られるかということは、当然の帰結として注目されるべきことである。オ ホーツク、擦文文化の中にこれほど製作されているのだから、アイヌ文化の中にあってもよいし、も しそれで用途が推測されるとすれば、一つの推理の資料になると思われる。ここで注目されるのが、 室蘭絵鞆遺跡のアイヌ墳墓から検出された製品である。

室蘭半島の先端部にあって、エンルム・チャシ岬とよばれ、標高15mの台地上で、通称エトモ・チャシといわれる。ここで1969年溝口 稠氏により続縄文期からアイヌ期に至る墳墓が調査され、そのうちアイヌ文化期の墳墓3基を調査、うち14号といわれた墳墓は、成年女子を葬った墓であった。

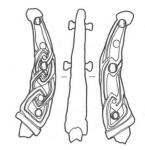
#### 『長方形の墳墓で、仰臥伸展葬』

副葬品に『骨製銛の柄(銛先は鉄)1、短刀(竹刀)1、骨製マキリ(柄が骨製)1、刀子1、小刀の柄(骨製)1、ヤス先または矢柄と思われる骨角器9、根付(骨製)1、ヘアピン1、漆器丸盆

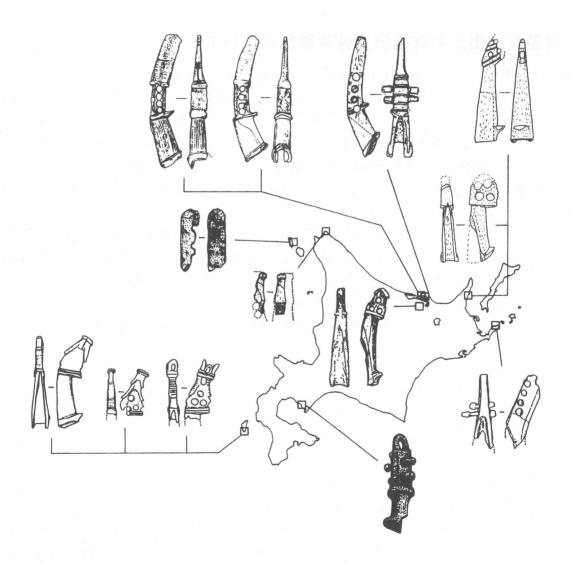
#### 1があった』

報告された溝口氏は『アイヌ期墳墓としては古く、500年(室町期)以前と考えられる。「小刀柄」としたのは、3ヶ所に穿孔をもつ、丸彫りである。そして、その彫刻文様の精巧さと美しさが見事である』と説明されている。

この小刀の柄にみる加工は「有栓弭型骨角製品」と同様であって、着柄部の形が違うだけである。着柄の方法が単純化したと思われる。アイヌ文化における唯一の遺物である。「マキリ柄」と「小刀」とは共通の文様構成をもち、特に輪を繋ぐ鎖状の文様が要素の一つになっている。この文様はアイヌ文様の代表的なかたちの一つで、「花矢」などにもみることができる。青苗貝塚の弭型鹿角製品の穿孔部は素文であるが、その頂部と周縁に付く刻みと頂部の彫刻は、エトモ・アイヌの「マキリ柄」の彫刻に共通性がある。なお、本品の茎部については破損のために形状を確認で



図IV-4 室蘭絵鞆遺跡14号墳 墓出土の「小刀柄」



図N-5 北海道における有栓弭型鹿角製品の分布 (弓弭状有栓骨角製品について『石守晃 群馬考古学手帳Vol.4』より引用)

きず、他の製品とおなじであるか不明である。

青苗貝塚の有栓弭型骨角製品とエトモ・アイヌの「小刀の柄」にみる共通性に注目すると、その用途の上でも共通するものがあったと考えるのである。

有栓理型骨角製品あるいは理型鹿角製品については、その興味ある形態からこれまでに種々論議されてきた。青苗貝塚資料もすでに系統図中に加えられ引用されている。筆者としては、上記の観察結果を述べて、関連資料との関わり方を述べるに止めておきたい。そして、さらなる関心はのもたれるのは、この道南のしかも日本海岸の孤島に忽然と現れたこの特殊な青苗貝塚の製品の系統をどのように考えたらよいかということである。

# あとがき

## 『奥尻島青苗貝塚出土の骨角製品と動物遺体』の調査と報告について

青苗貝塚出土の骨角製品と動物遺体の研究分析については、佐藤忠雄氏から依頼であった。その発掘現場を実査し、さらに整理も現地において行われた。青苗貝塚については、かつて筆者が在学した早稲田大学の考古学会機関誌『古代27号』1958年にこの貝塚の小報が掲載され、承知していた。この調査は1956年に行われたものである。筆者が北海道の動物遺体について意識的に調査する以前のことであったが、北海道の諸文化に対する関心は既にもち、1953年の夏休みに、北海道への旅を計画し、かなり広い範囲を回った。函館を皮切りに、途中いろいろな遺跡に立ち寄り、道東は釧路から網走を経て札幌に至った。札幌では北大で行われていた人類学、民族学の大会に出席して帰ったが、この旅行で北海道各地域での種々の動物遺体の在り方を知ることができ、参考になった。上述のように青苗貝塚の骨角製品と動物遺体の調査は、佐藤氏の要請であると同時に私の強い学問的関心もあったからである。その後、北海道各地、各遺跡の貝塚の動物遺体を調査、報告する機会をもったが、擦文期の貝塚に

ついては小幌洞窟などの報告例を知るのみであった。そのこともあって佐藤忠雄氏からの要請があったときには、この貝塚の重要性からもできる限りの努力をする考えであった。また1984年の故石附喜三男氏、千代肇氏による神恵内観音洞窟の発掘と報告にも関わることができ(それは青苗の資料を整理している最中であった)、両遺跡の比較には大きな関心をもったが、石附氏の逝去によって志半ばに終わっていることは、調査を推進させていた石附氏のことを考えると痛恨の思いである。

青苗貝塚の発掘に筆者が始めて参加したのは1976年11月5日であり、翌77年6月、さらに7月にも渡島した。当時は教職についてたが、できる限り調査に参加し、遺物の出土状況を詳細記録した。筆者の野帳には、出土した動物骨格についての記録が漏らさず記入されている。佐藤氏製作の図面についても、記入作業を東京で行っている。動物遺体の整理には発掘後に78年10月奥尻島に渡り、全資料を検討して、出土数を表に作成した。写真の撮影は、79年1月佐藤氏宅において行われたが、もちろん筆者が立ち会ってのことである。さらに、道埋文センターの大沼忠春氏から、かつて青苗貝塚からニホンアシカの頭骨が出土していて、これが道開拓記念館に収蔵されていることも確認、これも図録に収録した。もちろん青苗貝塚の報告での参考資料として掲載するつもりであった。図録はこの年3月奥付けで『奥尻島青苗遺跡・図版編』として刊行されている。その後佐藤氏から報告書作成についての種々の連絡があり、骨角製品については、すでに佐藤氏とその協力者による実測図ができていたが、主要骨角製品の実測図は私が作り直した。原稿の作成にかなりの時間を要したのはもちろんである。さらに比較資料との検討を行うために、80年の8月には北大の植物園博物館その他の施設に収蔵されているアイヌ資料、考古資料を計画的な調査を行った。これについては当時北大にいた西本豊弘氏の協力をえた。

しかし、報告書作成についての連絡はその後途絶えがちで、東京で佐藤氏に直接会い、出版計画を聞いたこともあったが、全く途絶えるに至った。1993年7月には未曾有の大災害が起きたこともあり、止むをえないことなのかとも考えていた。しかし、資料集が刊行されていることから、この遺物は当然注目されていた。私としては遺跡に携わったものの一人として、調査研究を行い、最終的な責任を果たすのが当然と考えてきた。そうでなくとも、なり振り構わずに資料を横取りする風潮が、研究者にあるのが昨今である。今回も早稲田大学の筆者の研究室に保管されていた資料を、私に無断に移動

させたのは、不信の念を拭い難いが、町教育委員会の当を得た計らいに、私は町学芸員の木村哲朗氏の協力を得て、刊行に協力するものである。そして、木村氏とも図ったのであるが、青苗貝塚の全資料の完全な整理とデータ化を考えている。これが今後のわれわれの仕事になる。

なお、文末になったが、青苗貝塚遺物の報告にあたっては奥尻町教育委員会社会教育課の方々に編集をはじめ多方面にわたり協力していただいた。厚くお礼申し上げたい。また北海道埋蔵文化財センターの種市幸生氏、土肥研晶氏からも種々ご教示いただいたことは有り難く御礼申し上げたい。

〈2003. 1. 4 金子浩昌〉

#### 参考文献

石川 朗・金子浩昌:釧路市幣舞遺跡調査報告書IV 北海道釧路市埋蔵文化財センター 1999、3

石川直章:回転式銛先再考 時の絆~石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編 1998、5

石附喜三男:アイヌ文化の源流 北方考古学業書-2 みやま書房 1986

石附喜三男・石川直章・金子浩昌:神恵内村観音洞窟 神恵内村教育委員会 1984、

石守 晃: 弭状骨角製品について、群馬考古学手帳Vol4、1~22、群馬県土器観会 1994

宇田川洋:北方地域における開窩式銛頭について(1) 北海道考古学 第23車耳 1987、3

宇田川洋:北方地域の古代弦楽器試論、「考古学と民族誌」六興出版198~214、1989

宇田川洋:ところの民俗考古学―とんこりと常呂―「北の異界 古代オホーツクと氷民文化 東京コレクション 2002、5

大場利夫・大井晴夫:香深井遺跡(上) 1976

大場利夫・大井晴夫:香深井遺跡(下) 1981

金子浩昌:北海道縄文時代の骨角製銛頭と栄磯岩陰遺跡出土の資料 栄磯岩陰遺跡発掘報告 北海道島牧村教育委員会 1973

金子浩昌:銛頭の変遷 歴史公論 5 雄山閣 1980

金子浩昌:未製骨角器ならびにその製作過程 オンネモト遺跡 東京教育大学文学部 1974

金子浩昌・西本豊弘:北海道・本州東北におけるオットセイ猟の系譜 季刊考古学11 1985

木村哲朗:青苗B遺跡 奥尻町教育委員会 1998 3

久保 泰: 札前 松前町教育委員会 1985

河野広道・沢 四郎:東釧路 釧路市教育委員会 1962

桜井清彦:北海道奥尻島青苗目塚について(第1次調査概報) 古代27 早稲田大学考古学会 1958、2

佐藤和夫・金子浩昌・末光正卓・土肥研晶:白老町虎杖浜 2 遺跡(2) 関北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第172集 2001

佐藤忠雄・金子浩昌: 奥尻島青苗遺跡・図版編 函館土木現業所・奥尻町教育委員会 1979、3

佐藤忠雄: 奥尻島青苗遺跡 奥尻町教育委員会 1981 3

佐藤智雄・五十嵐貴久:能登川コレクションの骨角器について 私立函館博物館研究紀要 第6号 1996

上奈穂美:縄文時代礼文島での海獣狩猟 加藤晋平先生古希記念考古学論集 2001 12

鈴木和夫: 奥尻島調査概報 札幌西高郷土文化研究部 郷土の今昔 - 創刊号 1949、10

高橋 健:続縄文前半期の銛頭の研究 東京大学考古学研究室 紀要16号 2001

竹田輝雄ほか編:神恵内村観音 2 号遺跡発掘調査報告書 小樽市博物館 1982

田部 淳:ヘロカルウス遺跡 E~G地点 泊村教育委員会 1996 3

種市幸生: 『抉入離頭銛』とキテの成立過程 栄浦第二・第一遺跡 常呂町教育委員会 1995

種市幸生:キテをめぐる諸問題-前編 列島の考古学 1998

種市幸生:キテをめぐる諸問題-後編 時の絆~石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編 1998、5

名取武光・峰山巌:入江貝塚 北方文化研究報告13 1958

西川博孝: 有栓弓耳とその系譜、先史考古学研究 第8号45~65 阿佐ケ谷先史学研究会 2001、11

古屋敷則雄・西本豊弘:戸井貝塚Ⅲ 縄文時代後期初頭の貝塚の発掘調査報告書 北海道亀田郡戸井町教育委員会 1998

北海道室蘭市:室蘭絵鞆遺跡発掘調査報告書、1971、3

前田 潮:擦文文化の回転式銛頭 国立民族博物館研究報告 第70集 1997

前田 潮・藤沢隆史・内山幸子:北海道礼文町 香深井6遺跡発掘調査報告書北海道礼文町教育委員会 2001 3

前田 潮・山浦 清・川名広文:北海道礼文町 浜中 2 遺跡の発掘調査 北海道礼文町教育委員会 1992

溝口禾周:(続)室蘭絵鞆遺跡A地区、アイヌ文化期墳墓と副葬品について、「第10回、高文連郷土研究会、

溝口禾周:『遺稿』室蘭地方におけるアイヌ文化期墳墓と副葬品について、アイヌ地方史研究13、1979、3月、

室蘭地方史研究会

峰山 巌:瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書 北檜山教育委員会 1980

室蘭大谷高等学校郷土史研究部、1976年1月

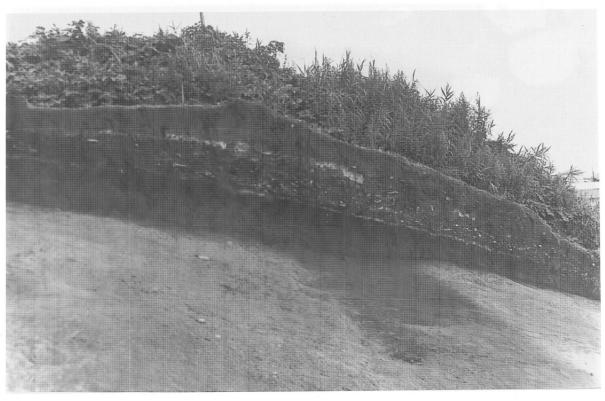
森 広樹・久保 泰:渡島半島南部の擦文時代の防禦集落 考古学ジャーナル・387 1995

渡辺 誠:縄文時代の漁撈 雄山閣 1973

# 写 真 図 版



貝塚の調査状況



貝 塚 断 面



遺物出土状況



貝 殼 等 出 土 状 況



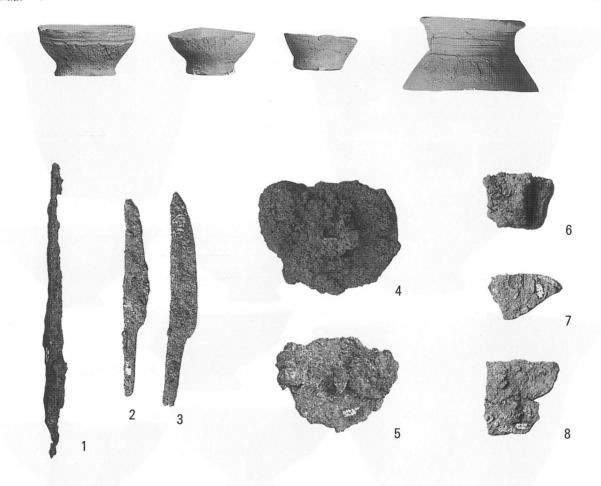
貝塚出土土器(1)

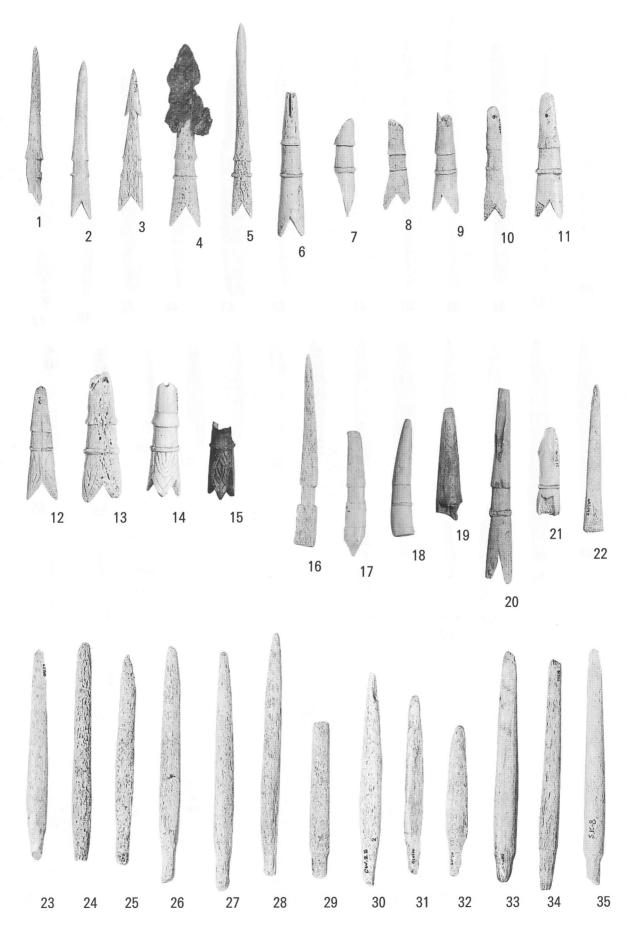


貝塚出土土器(2)

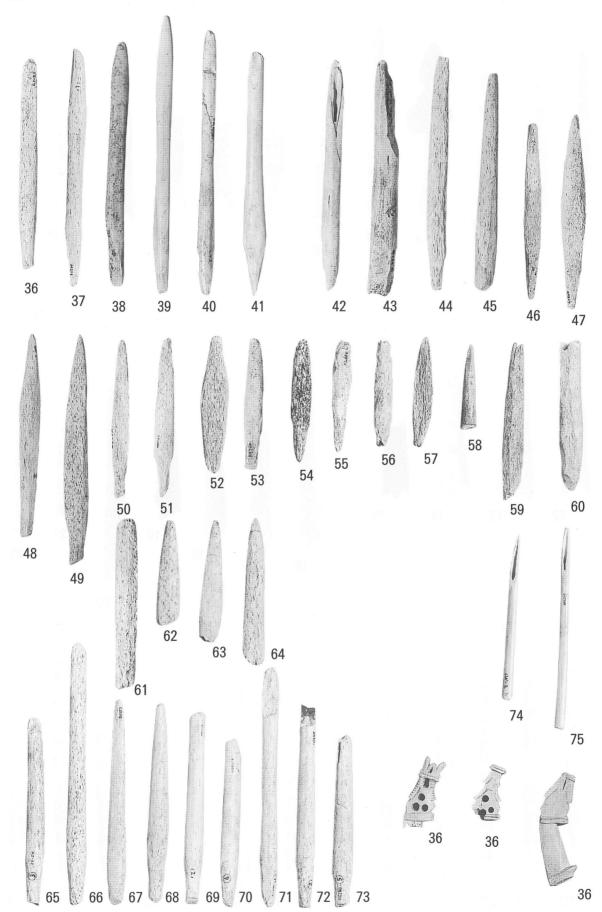


貝塚出土土器(3)

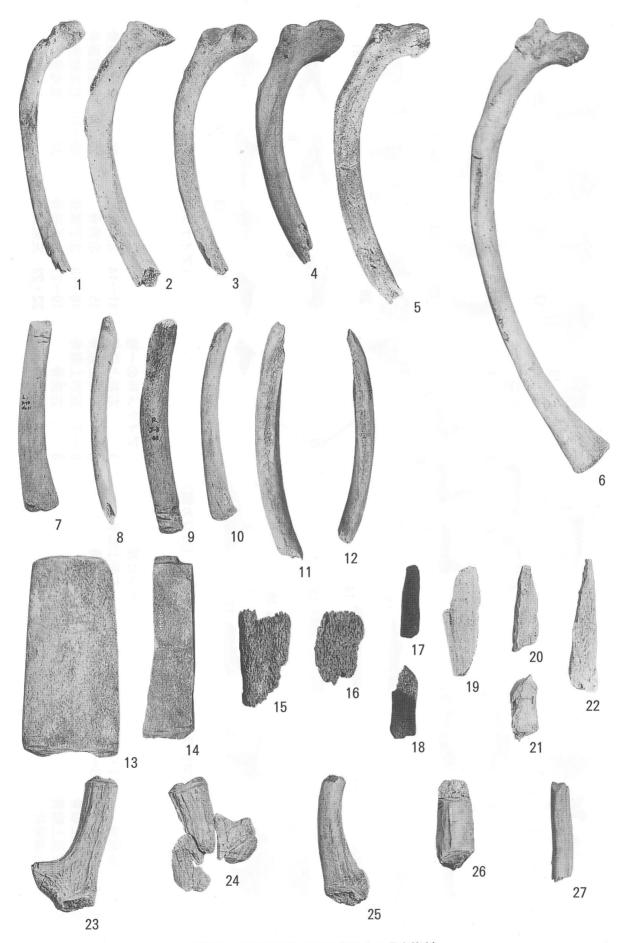




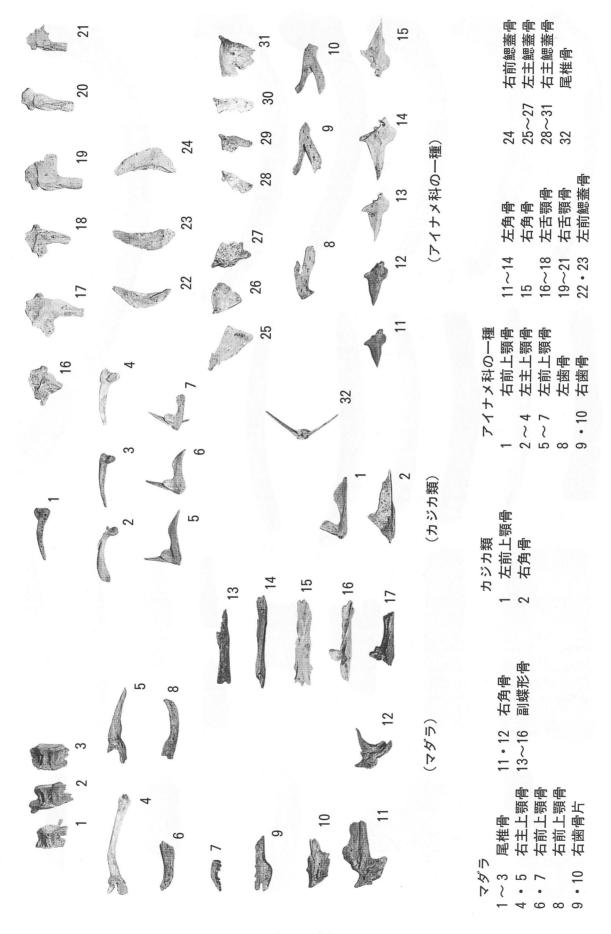
銛頭・アシカ肋骨製  $(1 \sim 3)$ ・半裁鹿角枝  $(4 \sim 12)$ ・鹿角をそのまま使う  $(13 \sim 15)$  銛頭未成品  $(16 \sim 22)$ ・中柄・鯨骨製  $(23 \sim 35)$ 



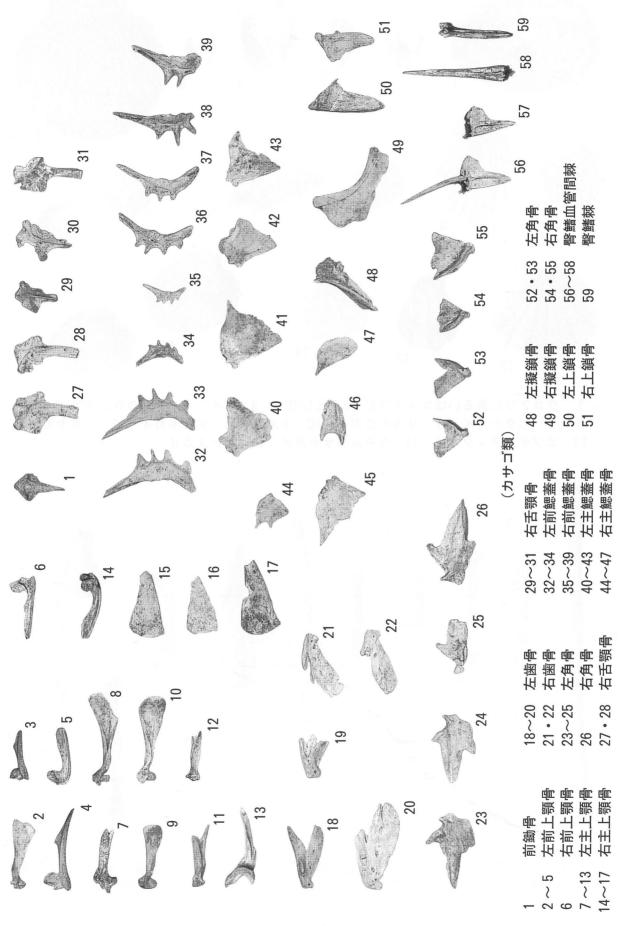
中柄・鯨骨製(36・37)・鹿角製(38)・シカ中足骨製(39~41)・中柄未成品・二重かさね鳥骨製(42)アシカ腓骨製(43)・その他(44~64)・ヤス状刺突具(65~73)・鳥骨製骨針(74・75)・有栓弭型鹿角製品(76~78)64



切断もしくは切り込み加工痕をもつ骨角資料

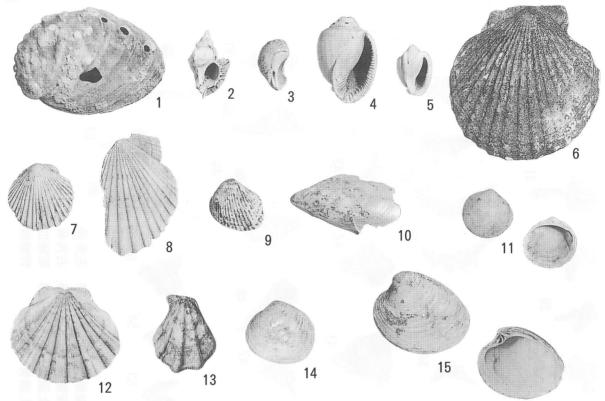


魚 骨(1)

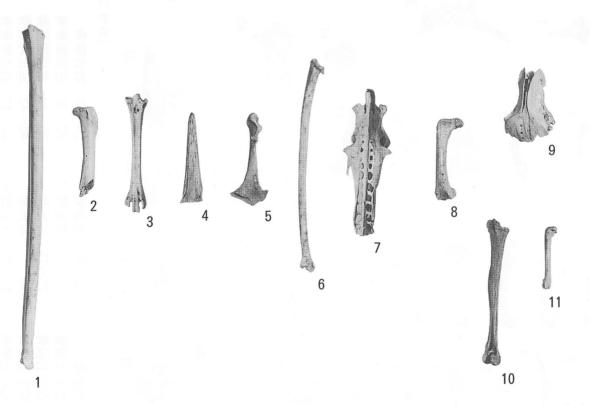


魚 骨(2)

#### 図版 12



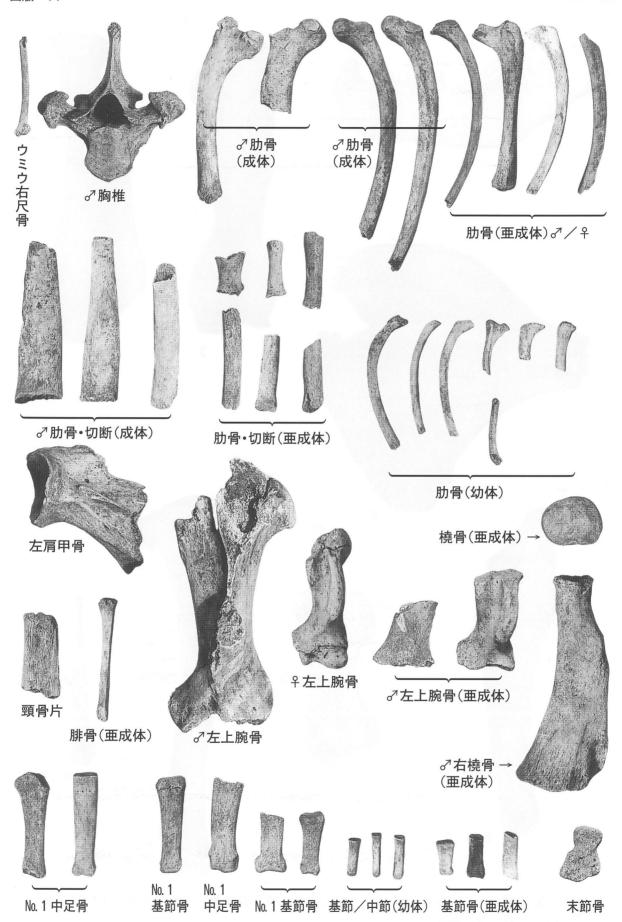
1 クロアワビあるいはエゾアワビ 2 ヒレガイ 3 バイ 4・5 ウラシマガイ  $6 \sim 8$  ホタテガイ 9 サルボウガイ 10 イガイ 11 タマキガイ 12 イタヤガイ 13 エゾキンチャクガイ 14 ウチムラサキガイ 15 ビノスガイ



1 アホウドリ右尺骨 2 アホウドリ右大腿骨 3 アホウドリ左中足骨 4 ウミウ上嘴 5 ウミウ鴉口骨 6 ウミウ左尺骨 7 ウミウ寛骨 8 ウミウ右大腿骨 9 カラス寛骨 10 カラス左脛骨 11 ウミガラス左上腕骨



1 ♂左下顎骨 2 左肩甲骨 3 右上腕骨 4 左橈骨 5 右尺骨 6 右寬骨7 右大腿骨 8 陰茎骨



L-10区 アシカ骨一括資料:アシカ遺体の出土状況の一例を示した。多くの肋骨が主をなし、主要四肢骨が少量含まれた。なお、細片がこの他にもある。

# 青苗貝塚における骨角器と動物遺体

~青苗貝塚の概要と骨角器・動物遺体の報告~

2003年3月発行

発 行 奥尻町教育委員会 北海道奥尻郡奥尻町字奥尻317番地地先 ☎ 01397 (2) 3890

印 刷 ㈱長門出版社印刷部 北海道函館市日乃出町11番13号 ☎ 0138 (52) 2461